兄は元勇者で妹は元魔王、今は二人で冒険者　　－元最強のＮＰＣ共（仮）

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄は元勇者で妹は元魔王、今は二人で冒険者　　一元最強のＮＰＣ共（仮）

【Ｎコード】

Ｎ６８３３Ｙ

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

どうも、元勇者な兄です、こんにちは、元魔王な妹です、私達、僕達、双子で兄妹な冒険者です。

へ？意味がわからない？

詳しいことは女神（腐）と作者（腐ゾンビ的な意味で）にきいてくれ。

といった感じで元勇者と元魔王の兄妹が仲良く世界を救ったリ壊したり、両親を翻弄したり溺愛されたり学生して見たり、冒険者になって見たりするお話です。

最後に世界を救うかはノリ次第。

そんな兄妹の魔王で勇者で三千年後、腐った女神にトリップされちまったぜ！テへ。

から始まる、双子と作者が暴走し続けるお話。

現在外伝終了、三章を投稿中です。

最後に、題名を変えるに当たって書き込んでいただいたｈａｋｉ様、竜胆先生、水鏡先生ありがとうございました。

ご意見を生かせたかどうかはわかりませんが、できるだけわかりやすい題名にしたつもりです。

勇者と魔王（前書き）

一話一話短めにのんびり更新。

勇者と魔王

「くはははは、そのていどかのう、勇者よ」

何枚も張り巡らされた結界魔法の中心でいかにも魔王、といった姿をした化け物が妙に高い声で高笑いをつづけていた、

勇者と呼ばれた少年はボロボロの体でありながら、瀕死状態のなかまをかばうように魔王の前に立ちふさがっている、

「なんじゃ、すでに返事をする気力まで失ってしまったようじゃのう」

「う、うるさい、魔王」

なんとか、声を絞り出したがそれが最後の力であったようで、勇者はそのまま地面に倒れ伏した、

「くそ、ここまでか、だが、覚えておけ魔王、僕が倒れても第二、第三の勇者が…」

「勇者よ、それは、魔王のセリフじゃ」

「……」

呆れたように言う魔王に対して、勇者は少し迷ってから言葉を続ける、

「たとえ、この身、何度たおれようとも、我が命、我が魂が朽ち果

てるまで神々の力で何度でも蘇り貴様の前に立ちふさがるだろう」

「それで、高笑いしたら、完全に魔王じゃな…、しかも、戦い方が蘇生頼みとは、魔王どころか、それ、もうゾンビじゃろ…」

「……」

ーーーーーー

勇者視点

くそ、何なんだこの魔王ってやつは、エンカウントしたと思ったら、速攻で僧侶（女）と、魔法使い（女）と戦士（女）をムチャクチャチートくさい、魔法で葬りさったくせに、僕に対しては、ねちねちと死ねない程度のダメージでいたぶってくる…

とっ、思えば面白そうに僕のセリフに対していちいち、ツッコミを入れてくるし、よくわからん？

だかな、魔王お前の遊びのおかげで最後の一撃を撃つための時間稼ぎはできた。

いくぞ一か八かの

「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》

ーーーーー
魔王視点

ふふふ、ほんとに飽きさせない奴じゃ、女三人連れて現れたときは、生き返ることが、できぬくらいまでバラバラにしてやろうと思いもしたが、ていうかどういうことじゃ連れている仲間がまえと違うとか、これなら、まえの戦士（男）三人連れた何がしたいのかよくわからんパーティーの方が遙かに増しじゃ…

て、そんな、話じゃなくてのー、ん、勇者が何かやろうとしてるのー、どれ、少し反撃してやるかの…

「我穿つ漆黒の三つ叉魔槍」（ブラッド・ジャベリン）

ーーーーー

勇者の身体を何十本の魔槍が貫く、それでも、勇者は口元に笑みをうかべていた。

「魔王、油断したな…」

魔王の身体を一条の光が貫き通していた、闇雲にに放ったはずの一撃は、魔王の結界ともに、奇しくも魔王の核を撃ち抜いていた、

「クックックッ、、久しぶりだよ勇者、何千年ぶりかのう、これが死ぬ感覚というやつだったかのう」

どこかうれしそうに声色を発しながら、徐々に魔王の身体が虚空に消えて行く、

勇者も限界なのか、色の無い瞳で虚空をにらむ、

「さようならだ、魔王、二度と出会わない事を願っているよ」

「つれないのぅ、お主が居なければこんな世界、詰まらぬではないか…」

「僕は、もうごめんだ…終わることの無い、この不毛な戦いも…お前のその見慣れた面を拝むのも…」

「見慣れた面…、おお、そうか、そうじゃのぅ、長き、遊びに付き合ってもらった礼もあるしのぅ」

何か納得したように、魔王がうなずくと、それっ、っと一声発してその頭にかぶっていたらし化け物の顔の仮面をはずす、その下には、

「なっ、お…おんな！」

「またのう勇者、輪廻の果てで合おうぞ、いつまでも続く終わり無き時の果てでのう…」

そう、一声かけると魔王は、ゆっくりと虚空にきえさった。勇者の驚いた顔がさぞ可笑しかったのか、その口元に微笑を浮かべながら。

勇者と魔王（後書き）

今回は、書き溜めていたので投下します。
転生物のぞくに言う一章ですね。

転生者　勇者（前書き）

二話目です。

転生者　勇者

薄っすらとしていた光が瞬きを繰り返すごとに、段々ハッキリしてくる。
またか、何度転生を繰り返しても、あの腐れ女神と顔をあわせるのだけは、憂鬱だ。

「お帰りなさい、今宵の旅はいかがでしたか、『導き手』殿」

目の前には、ＢＬ小説を片手に、女神様が紅茶を飲んでいた。

「ただいま戻りました、女神様。今回は、魔王を倒せたものの、私も命を失ってしまいました」

何時もの事なので、特に気にせず返事を返す、

「そう、お疲れ様。それで『導き手』殿、次はどこに行きたいですか？」

手元から少しも目線を話す様子が無いまま、少し頬を染めている女神様が聞いてくる。

「どこでもかまいません、女神様の御心のままに。と、言いたいところですが。一つだけお願いが、魔王のいないところでお願いします」

正直行く場所はどこでもよかった、とりあえずこの腐れ女神様とあの魔王から離れられるなら．．．

「魔王、ああ、『秩序』(魔王)のことですか。つまり、魔王である彼女がいなければどこでも良いと、言うことですね」

ＢＬ小説を凝視したまま、返事をする女神様、てか、このお方さっきから一度も瞬きしていない、魔物よりよっぽど怖かった。

「ええ、どこでもかまいません」

ちなみに、今まで繰り返してきた転生の中で、魔王の性別を知ったのは始めてだ。

というか、なんども会っているのに、魔王に性別があると知ったこと事態が初めてだ。

いつもいつも、化け物の皮なのか、幻影魔法の一種なのかよくわからないが、典型的な『魔王』然とした格好をしていたため気にしたことすらなかったのだ。

そんな感じで、少しそれてしまって気がする思考を悶々と続けていた所に、ありえない言葉が降ってきた。

「では、さっきまでいた時間軸から三千年後に転生してください」

では、とは何だろう、確かにどこでも良いと言いはしたが、三千年後だと。

脈絡が無さ過ぎる、てか、一回くらいその手元のＢＬ小説から目を上げろよ、この腐れ女神様が泣くぞこのやろう。

と、戸惑う思考を押さえつけて、とりあえず疑問をぶつけてみることにする。

「三千年後ですか、せめて、その理由だけでも教えていただきたいのですが、この腐れ・・・」

おっと、考えていたことがそのまま口から出そうになった。

「理由ですか、転生の時間を決めるのは、私ではなく『時代』なのですよ、私は『導き手』を必要としている『時代』に、あなたを送っているに過ぎませんから」

腐れ女神様は、まったく顔を上げずに理不尽な言葉を、吐き続ける。

「わかりました、ではそれで納得することにして、三千年後に行ってまいります」

まあ、このくさったお方と問答をしてもしかたがないので、内心の動揺をもみ消して指示に従うことにする。ていうか、この人（人ではない？）は、一度言った言葉をけして曲げないので、反論する意味がまったく無いのだ。

そんな感じの会話を終えて、体をリラックスさせると、ゆっくりと目を閉じていく。

転生のための準備だ、感覚としては、睡眠が一番近いかもしれない。

「では、おやすみなさい『導き手（勇者）』殿、最後の旅に光の加護があらんことを」

薄れいく意識の中で見えたのは、手元から少しだけ目線をはずした女神様だった。

その表情が、少しだけさびしそうに見えたのは、僕の気のせいかもしれないが・・・。

転生者　勇者（後書き）

感想などありましたらよければ。

転生者　魔王（前書き）

三話目です。

転生者　魔王

わたしが、転生の間に入っていくと、女神様がその手で優しく光り輝く球状の者を抱きしめていた。

「なんで、そこまで大好きなのに、いつも本で顔隠して気の無い不利をするのかねぇ、あんたは」

「な、ナンノコトデスカ、知りませんよ」

私は腐った林檎なんですから、とか意味のわからんことをのたまってらっしゃる方の頭を、ひっぱたいて、とりあえず意識を戻すかね。

「おーい、帰ってきんしゃい、この腐れ女神」

「ぶはっ、って腐っても女の子ですよ、顔面はやめてください、顔面は」

腐ってもって、勇者の前ではかっこつけるくせに私のまでとことん繕おうとしないなこのお方は。

「これが、恋ってやつかねぇ、甘酸っぱいねぃ」

「ぶっはーー、っここ、鯉、淡水魚には興味ありませんからーーー」

なんかあせった女神様が、紅茶噴出しながらおろおろしていらっしゃる、おお、おもしろい。

て言うのは、置いといてこっからは少々まともな話だね。

「で、女神様、実際問題私たちが『三千年後』に転生するって言うのはなぜなんさね、それにさっきの最後の旅って言うのも気になるさね」

私が、会話を変えたことでようやく落ち着きを取り戻した女神様（腐）、

「て、（腐）てなんですかーーーーーー」

「なにに、叫んでんのや」

「うう、世界の不条理にです」

と、腐った小説に顔うずめながら泣きまねしちょるけど、口がにやついてるって、女神様（腐）、

「あなたもですかーーーーーー、いえもういいです、これ以上いくと話が進みません

それで、なぜ『三千年後』かって話ですね」

「そやそや」

「実は、私の力では直接『三千年後』に干渉できないですよ、多分人間たちが何か世界に干渉したんだと思うんですけど

だから、実際に送るのは、十五年くらい前になると思います」

なるほど、『三千年後』に何かある可能性があるから、それを調べてほしいと、で、実際送られるのはその十五年ほどまえっちゅうこ

とやな、まあ十五年で準備しろってことかいな、なかなか厳しいこと言ってくれるのな。

「十五年か、なかなか、厳しいこと言ってくれるのなぁ」

「まあ、初心に戻ったつもりで、楽しんでくるといいですよ」

初心？ちゅうことは、

「なんや、うちら、今までの成長全部パーなんか」

「ええ、まあ、そういうことです、『三千年後』に飛ばすって言うのはそれだけリスクの高いことなんですよ」

「マジかい、それじゃうちだけ二百年待ったりしなくちゃいけないんじゃ・・・」

「それは、大丈夫です『導き手』と『秩序』は対の存在ですから、ちゃんと同じ時空に落ちるようにしますよ」

その言葉にちょっとほっとするわー、正直勇者たんが二百年も来てくれないとかなきそうになるところだったよー、

「それじゃ、最後の話ですね」

いつにも無く、まじめな顔の女神様（腐）、

「もう、いいです・・・」

「何いきなり、いじけてんのや」

胸に抱きしめた勇者の魂にのの字をかくなや、
気をとりなおして、
「それじゃあ、最後の話ですね」
「なんや、さっきから最後最後って、なんかもう二度と会えない見たいやんか」
「ええ、そのまさかですよ」
「な、」
「今までの、数え切れないほどの転生、それに今回の『三千年後』もの月日を越える転生、はっきり言って、お二人の魂はもうこれ以上、転生という輪廻に耐えられる状態ではないのですよ」
な、かなり驚きの報告やね、そうか
「じゃあ、これでお別れなんか」
「ええ、そういうことになりますね」
だから、さっきも勇者の魂抱きしめてないておったんやな、私らは存在を付加されて、この世界の守り手として女神様に作られたんやから、子供みたいなもんやもんな、
「ふん、湿っぽい話はなしや、ほなうちもいくわ」

「魔王たん、言葉使いがめちゃくちゃですよ」

「む、わかってるわ」

「ティッシュは持ちましたか、ハンカチは、さびしくない？大丈夫？」

「ああ、もう遠足前のお母さんかって、大じょぶやから、安心して見送らんかい」

そう言って転生陣の上に立つ、ほな、いこか。
うるうる、瞳に涙を溜めている女神様は見ない見ない。

「それじゃあ、いってくるよ」

「うん、がんばってください・・・」

「いままで、ありがとうな・・・・・・、お母さん」

キュィーン、光に包まれながら静かに魂に還っていく。
さようなら、おかあさん。

しばらく経って、転生の間には、なきながら二人分の魂を抱きしめている女神様がいた。

「さようなら、クレア、サクラ
きっと、いえ今回こそは、二人とも幸せになるのよ」

やさしく抱きしめた、二人の魂が静かに世界に還っていく。

そこにあるのは、今まで以上の困難だろう、それでも二人には幸せになってほしかった。

たった二人の可愛い子供たちに。

転生者　魔王（後書き）

次でとりあえず今回の投下分はおしまいです。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」ｂｙ女神様（腐）（前書き）

とりあえず転生編最後です。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」ｂｙ女神様（腐）

そこにあるのは静謐な闇にして、暖かい空間。

俺の意識が戻ったのは一寸前だった。

きっとここは俺の母親に当たる人の、お腹の中なのだろう。

そこまで、理解していまさらながら子供に戻ってしまったのかと心底後悔する。

だって、あれだぞ、なんていえばいいんだ、ここ最近はある程度年をとった状態で転生してたからな。

気恥ずかしいというか、魂の年齢的には何千歳経っているかわからない俺だぞ。

と、そこまで考えて、この母体という空間にもう一人、先客がいることを思い出した。

と、言ってもおれは今意識が戻ったという話でずっと一緒にいたのだろうが。

そうだな、この子は、男の子だろうか、女の子だろうか。

きっと俺は遠くない未来に旅に出ることになるだろうが、それまでこの子を大切にしてやろうとなんとなくそう思った。

ん、世界が明るくなった、もしかしたら生まれるのかもしれない。

「おぎゃーーーーー」

そう思っていたら、自分の口から酸素を求める産声があがった、

あぶねー、正直呼吸できなくて死ぬかと思った。

まあ、俺のことはいい、俺のあとに妹も無事生まれてきたみたいだ。

女の子だ、妹だ、ワッショーイ。

そして、妹が産声を上げながら静かに目を開ける、いやーやっぱ俺の妹可愛いな。

そして俺と妹の目が合った瞬間俺は理解した。

確かに意思が宿る、その瞳。

何度も顔を合わしたが、実際に顔見たのは一度だけ。

それでもわかる理解できてしまう。

俺の妹は、魔王だ・・・・・・・・・・・・・・・。

―よろしくお願いします、お兄様。

双子だからなのか、なぜか伝わってきたその言葉

それを聞きながら俺は意識を失った。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」ｂｙ女神様（腐）（後書き）

正直何歳からはじめるか悩んでいますがぼちぼちがんばります。

誤字脱字感想など書き込んでくれると嬉しいです。

最強の妹と最狂の母上（前書き）

悩んだ末、とりあえず三歳から
理由は、自分も物心がついたのがこのくらいだったかなー
とかそんな単純な理由です

最強の妹と最狂の母上

―なあ、妹よ

―はい、どうしました、お兄様

―どうして、お前は魔王なんだ

―とても哲学的な命題ですね、お兄様

―そんな大層なもんじゃねーーーーーーーーー！！！！

これが、俺と妹の最初の兄弟げんかでした。
あれから、三年くらい月日は流れただろうか、今でも俺は妹に勝つことができないみたいだ。

「なあ、サクラ」

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「どうして、お前は魔王なんだ」

「お兄ちゃんだって、魔王じゃない」

というわけだ、どこで狂ったのか、はたまた双子として血がつながってしまったためか。
俺は、勇者にして魔王という奇妙な存在に成り果てている。
具体的に、言えば、もともと金髪で蒼の瞳だったおれは、金髪の前

髪の部分に黒のメッシュが入っており、目は蒼の瞳と金の瞳のオッドアイになっているし、サクラは綺麗な黒髪で前髪に金のメッシュ、俺とは左右対称のオッドアイをもっている。
正直に言おう、黒髪のオッドアイ、しかも金のメッシュを丁寧に三つ編みに結い上げた今、目の前で小首をかしげている少女は、正直めちゃくちゃ可愛かった。
仮面をつけていた魔王時代ならともかく、俺はこの凶悪な可愛さを持つ妹魔王に二度と勝てないなという自身がある。

しかも三歳だぞこの美貌でゴスロリドール見たいな格好して、小首を傾げてみろ。
お兄ちゃん、悶絶死するわ。

念話でしか、意思疎通ができなかったころこそがんばったが、もう無理です。
お兄ちゃん、この子がいないと生きていけません。
は、今の笑顔はそこまで考えてのことかなんと言う策士、お兄ちゃん子のこの将来が心配です。

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「サクラ」

「はい」

「お母様の、足音がする」

ドバーーーーン、毎度毎度、家が壊れるんじゃないか、というレベルの音を立てて、母親が外に飛び出してきた。

「クレアーーーーー、サクラーーーーーーーー、お母さんを置いてどこにいってしまったのーーーー、」

そして、絶叫、ここが閑静な森の中にある自宅じゃなければ、近所から苦情がきそうなほどのおんりょうである。

「おかあさん、ここにいますです」

クスっと、クレアが人懐っこい笑みを浮かべると、俺意外と話すときの年相応の口調になる。

「クレアーーーーーーー、サクラーーーーーーーー」

母、マリアが、騎士もびっくりのスピードで俺たちの前まで来ると、ひしと俺とサクラを抱きしめて、オンオンなき始めた、こうなるとまだ年相応の体しかもたない俺とサクラには振りほどくこともできず、されるがままになるしかない。

「ははうえさま、なきやんでください、お、ぼくとサクラは、ははうえさまがねているあいだに、おはなのかんむりをつくって、おどろかせようとしただけなんです」

「クレア、サクラ」

もしもの、ために考えておいた言い訳を俺たちを抱きしめて泣きじゃくっている母親に打ち明ける、母も嬉しそうに泣き顔を笑みの形に変えながら。

「おきて、二人がいないことのほうが驚いたわ、この馬鹿息子」

罵倒してきた、ええー、今罵倒されるシーンだっけ。
ほめられるとか、そんな感動的な展開は無しですか母上。
実際のところ妹と普通の言葉遣いで話すために、人気の無いところに出てきただけだったので、つかまって家に帰るのに反対はしないのだが、この後、一応作っておいた花の冠を頭につけた母親に小脇に抱えられ家路につく俺たちであった。

「サクラ」

「はい、おかあさん」

「ちなみに、この冠の作り方は誰に教えてもらったの？」

「ドロシーですよ、おかあさま」

正直に、俺達の家のメイドさんの名前を明かすサクラ、

「そう、じゃあドロシーにきつくお説教しとかないとね」

「へ、なぜですかははうえさま」

「あたりまえでしょ、花の冠のせいで可愛いクレアとサクラが家出したのよ！！！！」

――家出じゃねーよ！

心の中で同時にツッコんだ俺達を小脇に抱え、今日も優雅独尊な母が行く。
いや、普段はかなりの淑女なんですよ。
俺とサクラのこととなるとキャラ変わるだけで。

そんな、誰に弁明しているのかわからない、俺達を抱えて母は家路に着いたのだった。

ちなみに、予断だ、両手がふさがった母上が扉を蹴破ったのは。

母上、俺とサクラのこととなるとキャラ崩壊するのは、勘弁してくれ。

最強の妹と最狂の母上（後書き）

とりあえず、ぼちぼちとやっていきます。
誤字脱字感想などありましたら書き込んで下さると嬉しいです。
更新としましては、基本毎日、祝日、休日などはアクア、とグラビを書いているので更新しない場合もありますが、基本平日は短いですが一話ずつ落としていきたいと思います、このペースでいつまでいけるかは不明でですが、お付き合いいただければなと思っています。

魅了する息子とストーキングする父親（前書き）

なんか、サブタイトルがもういろいろ駄目なことになっていますがお気になさらず。

魅了する息子とストーキングする父親

―なあ、妹よ

―はい、お兄様

―なぜお前は、【以心伝心】を使っているときと、普段呼ぶときに呼称が違うのだ？

―お兄様、ドロシーたちの前でお兄様と呼んでほしいのですか、ポッそんな台詞と共に頬を染める三歳児と、それを見て身悶える三歳児、そんなあたり前の日常が今日も続いていく。

「それで、サクラ」

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

―クッ、お兄ちゃんも捨てがたい

―お兄様、思考が駄々漏れです

コホン、と心の中で気を取り直して。

「今日は、何をして遊ぼうか」

「かけっこをしますか、それとも、またお花の冠を作りにいきますか」

―いい、模範解答だ妹よ

―お褒めに、預かり光栄ですお兄様

―それで、結局のところどうする

―今現在の、自分達の戦力の分析それは必須事項だと思います

ちなみに、サクラ、魔王の言葉使いに違和感がある方もいると思うので、補足するが。

簡単にいえば、転生によって幼児退行しているのである。

あの、しゃべり方、性格は何年も生きて出来上がったものであり、転生当初、特に子供に転生したときはいつもこんな感じになる。

「そうだね、じゃあ草原に行ってかけっこをしようか」

―そうだな、広場のほうで体力の確認を行おうか

「わかったよ、クレアお兄ちゃん」

―わかりました、お兄様それでは、先に行っていますので

「うん、サクラは先に行っていていいよ、ぼくは、お父様に許可を貰ってくるから」

―サクラは、先に行っていてくれ、俺は扉の陰に隠れた、ストーカーに話をつけてくる

「うん、いってきまーす」

ー頼みます、お兄様

扉の影から、サクラが向日葵のような笑顔を浮かべてとてとてと走り出したことによって、あせって身を隠す気配が伝わってくる。

ーまだまだ、甘いな、お父様

俺も、ひとつ苦笑を浮かべると、父親の書斎に向けて走り出した。その途中、隠れている気配のすれすれを通っていくことも忘れない。

ーおおー、あせってるあせってる

決して急がずに、走って父親の書斎の扉の前にたどり着くと、俺はノックをして部屋の扉を勝手に開けた。

「しつれいします、おとうさま」

「ああ、よくきたね、クレア」

軽く息を乱しながら、出迎えてくれた父親、見た目は蒼髪でモノクルをかけ魔法使いが好んできる黒いローブを身にまとった青年、年齢不詳、は転移魔法らしい魔法の名残を一生懸命隠しながら、俺にさわやかに微笑んだ。

ーお父様、体面保つためにそこまでするんですか

もちろん、俺の心の声は父親には届かない。

ちなみに、年齢不詳の某母上様が金髪なのに対して、俺は金に黒のメッシュ、サクラは黒に金のメッシュの髪色のため、一時期、妻が浮気をしていたんじゃないかと悩んだとか。

まあ、今そんなことはどうでもいい、いまは外にいく許可を得ることが先決だ。

「おとうさま、サクラとふたりでおそとにあそびにいきたいのですが、よろしいですか」

なぜか、父親が悶えている、何々、「サクラと一緒の時の凛々しいしゃべり方もいいが、したったらずもたまらない」だと、お父様、安心してください、あなたと俺は間違いなく親子です。

「ああ、ぼくはかまわないよ、二人で遊んでおいで、でもくれぐれも危険なことをしないようにね」

よっしゃー、言質はとった、後は止めを刺すだけだ。

「うん、ありがとう、パパ」

太陽の様な笑顔に、蒼目のウインク付の感謝の印、

「グハ、イッテラッシャイ」

ちなみに、お父様が片言になっているのは、ウインクして残った金の瞳、「魔王の魔眼」には「魅了」の効果があるからだ、両眼そろっているときよりは、その威力はかなり落ちるらしいが、好意を持ってくれている人間に使う場合はそれでも十分だった。

なぜか吐血しながら身悶えている、父親を置き去りに、俺は外に向かって走り出す。

今日、やることは自分達の今の実力の確認。

それを行えば、これから十二年間の間で自分達がやるべきことが見

えてくるだろう。
そんな期待を込めて俺は走り始めた。

「ふう、我が子ながら、なんて威力だ」
息子が走り去って数分、ようやく、意識を取り戻した父親は、部屋の窓を開けると、静かに詠唱を始める
。

「さて、いくか、今日はどんなびっくりすることを拝めるかな」
飛翔魔法、操作性の難しさのみを言えば最上級魔法にも劣らぬ魔法を、子供達のストーキングのためだけに発動すると、今日も心配性な父親は空に旅立っていった。

魅了する息子とストーキングする父親（後書き）

黄金拍車様わざわざ、誤字のご指摘ありがとう御座いました。

これからも誤字脱字感想などありましたら書き込んでいただけたら幸いです。

混成種<ハイブリッド>な俺達（前書き）

その名のとおり今回は、存在と二人がどんな状態なのか、そんな軽い説明です。

混成種<ハイブリッド>な俺達

―妹よ

―はい、お兄様

―端的に言おうか

―はい

―俺達は、弱くなってしまったようだ

家から、少し離れた草原の中、俺は、のんびりと座り込むサクラの傍でうなだれていた。
先も言ったとおり、俺達は弱くなっていたからだ、いや、正確にいわば、俺達ではなく、主に俺が。
子供になっているのだから、当たり前だって。
そうゆう意味ではなく、『存在』として俺は、弱くなっていた。
簡単に言えば、魔王と勇者、血がつながってしまった結果、俺達は存在が混ざり合ってしまった。
ゆうなら、魔をつかさどるものと聖をつかさどるもののハイブリッドである。
しかし存在として、ハイブリッドが成功するわけは無く、非常に不安定な二人が出来上がってしまったといえるのだった。
まずサクラ、魔王は、魔族の膂力と無尽蔵の魔力を有した上で、聖属性以外の魔法がすべて使える、魔をすべる王、それがもともとの存在である。
今現在のサクラは、俺の聖属性をほとんど吸収し、全属性の魔法を使えることがわかった。なに、最強じゃないかって、はっきり言う、

最弱だ。
まず、本来魔法使いは、一属性しか魔法を持つことができない、ほとんどの魔法使いは、己に与えられた属性を極めていき高みを目指す。
そして、その行き着く先には、ほとんど差異は無いのだ。
たとえば、水の魔法使いなら、水を物理的に操る事で、飛翔することも可能だし、火の魔法使いなら、空気を爆発させる事で、空を飛ぶことができる。
つまり、属性が違えども、そのたどり着ける場所は、己の努力、独創性しだいなのだ。
しかしサクラの場合は、違う、すべての属性を操れるということは、そのすべての属性を極めるのにほかの魔法使いの１０倍以上かかるということをさす。
全属性が、たどり着ける高みが一緒なため、全属性を使えるメリットはあまり無いのだ。
そして致命的なのが、俺の聖属性を取り込んでしまったせいで、彼女は魔を浄化されてしまっていた。
つまり、今の彼女は魔族より神族、そして神族より限りなく人間に近い存在である。
つまり、魔族の強力な膂力と無尽蔵の魔力というアドバンテージを失ってしまっていたのだ。

そして一番深刻なのが俺であった。
おれ、勇者じゃなくなくなっちゃった。
サクラの、魔族の証である魔性を俺の聖属性が打ち消したため、俺の身体には聖属性が少しも残っていない、その上、消しきれなかった魔性が俺の身体を侵食したため、今の俺は、サクラより魔族に近い存在になっていた。
しかも、俺がもともと操れた魔法は聖属性のみ、その聖属性が体から無くなった今。

―俺、魔法使えないじゃん

というわけで、俺は今現在、絶賛うなだれ中です。

―お兄様、気をしっかり持ってください、お兄様には無尽蔵に近い魔力と、勇者を軽く越える膂力があるではないですか、私なんて、火の玉一個で魔力切れの上に、ここまで歩いてくるだけで座り込んでしまうほど体力が無いのですよ

―魔力があっても、それを使える系統魔法が無いんだよ、しかも、力も強すぎて意識すると制御しきれないし

俺のパワーは、勇者であったころとは比べ物にならないほど凶悪になっていた、三歳児がそれを実感してしまうほどに。
日常生活では、支障が無いのだが、いざ、剣の稽古でもしてみようかと木の棒を持った瞬間、俺の手の中でその木の棒は木っ端微塵に砕け散った。
ためしに、広場にあった大岩を思いっきりぶん殴ってみた、簡単に言おう、爆裂した。
三歳児の、パンチで。

俺が、泣きそうになったのは言うまでも無い。
うん、これからどうしようか。
とりあえず、サクラは体力と魔力保有量の訓練、俺はこの有り余る魔力の使い道と、ひどすぎる力の制御だな、まあ、とりあえずは明日からだ。

今日は、もう動きたくない。

―ちなみに、お兄様

―なんだ、妹

―さっきお兄様が、大岩を爆裂させたときに

―ああ、させたときに

―その破片に当たって、お父様らしき物体が上空から落下、そのまま近くの森に突っ込んだのですが、どうしましょうか？

―・・・・・・・・・・・・・・・ほおっておけ

混成種<ハイブリッド>な俺達（後書き）

投稿時でＰＶ２７５６　ユニーク３８４でした。
皆様、ありがとう御座います。
誤字脱字感想がありましたら書き込んでくれたら嬉しいです。

書庫に行こう、妹よ（前書き）

タイトルに反して、今回は妹目線です。
まあ、いまんところは感情が希薄なので、あまり楽しいできになっている保障はありませんが。

書庫に行こう、妹よ

―お兄様

―ん、どうした妹よ

―どうして、私達はこんなにコソコソとしているのですか

―いい質問だな、妹よ、今からお父様の書庫に忍び込むからさ

―どうしてですか、魔法の技術と知識なら私達は十分持っていると思いますが

―知識が偏りすぎていると思うんだよ、俺達は転生する前からこの三千年間なにがあったのか知らないからな、つまり俺達が魔法だと思っているものが今でも魔法だとは限らないと思うわけさ。

―なるほど、それで、お父様の書庫にどうやって入るのですか、窓から出れる外と違って書庫は本が傷まないように窓が無いですし、扉のノブも私達が届く高さじゃないですよ？

―・・・・・・・・・・・・

固まる、お兄様でした。皆さまこんにちは、私サクラは今日も愉快なお兄様と廊下を歩いております。

―お父様に、あけてもらう

―お父様が今日出かけているからこそ、私達は書庫に向かっていると記憶していますが

―母上様に、あけてもらう

―お昼寝中の、お母様を起こした瞬間私達は、二度とお母様の腕から離れられなくなるでしょうね

―ド、ドロシーにあけてもらう

―それが、妥当でしょうね

なら、なぜ、最初からドロシーに頼まなかったのか。
まあ、あまりドロシーに迷惑をかけたくないのでしょう、私達とは五歳違いの姉のような存在であり、メイド長のカタロニアさんの娘であるドロシー、カタロニアさん譲りの銀髪に薄い褐色の肌、八歳といっても、可愛い盛りのドロシーに実質三歳、精神年齢不明のお兄様は、あまり迷惑をかけたくないようです。
いまさら、遅いとも思いますし、それを嫌がってもいないと思うのですが。

―お兄様

―どうした、妹

―ちょうどよく、ドロシーがこっちに歩いてきてますよ

―・・・・・・・・・そうか

ため息をひとつ吐くと、お兄様はその表情を普段の子供らしいもの

に切り替えました。

「ドロシー姉ちゃん」

そう言って、こちらに気づいて笑顔を浮かべたドロシーに抱きついていきました。

お兄様、楽しそうですね。

「カレン様、サクラ様、今日はどうなされたんですか」

その端正な顔に微笑を浮かべた、ドロシーがお兄様を抱きとめながら聞いてきます。

「うん、サクラと二人で、文字のお勉強をしたいんだ、だから、お父様の書庫を開けてもらえないかな」

お兄様、ドロシーの前だと、大人ぶりますわよね。

「書庫ですか、かまわないですが、お二人にはまだ早いのでは」

ドロシーも、チョット困惑気味なようですね。

「お・ね・が・い」

上目使いで、笑顔を浮かべると「魔王の魔眼」なウインク、お兄様それは反則です。

「ハ、ハイ、わかりました」

ほら、ドロシーも顔赤らめてふらふらしてるじゃないですか。

けっか、扉は開きました。

ドロシーは、だめ、相手はクレア様なのよ、でもこの胸の高鳴りは、だめよ相手はまだ三歳なんだから、などぶつぶつ呟きながらお仕事に戻って行きました。

ドロシー、お兄様を盗ったら、許さないですよ。

おほん、それでは気を取り直して、本でも読みますか。

「あら、どうしたんだいドロシー、風邪かい？」

お母さんがお料理中の厨房に、戻ってきた私にお母さんが尋ねてきました。

お仕事中はとっても厳しいですが、普段はとっても優しいお母さんです。

「ううん、違うよチョットのぼせちゃっただけだよ」

「それが、チョットなのかい」

わたしに、そっくりな顔、口調に似合わないその綺麗な顔を、苦笑の形に変えると、優しくポンポンと私の頭をなぜてくれました。お母さんの手はとってもあったかくて気持ちがいいです。

「ありがとう、もう大丈夫だよ、お母さん」

「そうかい」

と、優しい笑顔を浮かべると料理の続きに戻っていくお母さん。
それを、見て私もお仕事に戻ることにします。

「あの、ませガキ、ドロシーに手出したら、消してやる」

そんな、呟きが聞こえたような気がしましたが、気のせいだと信じています。

書庫に行こう、妹よ（後書き）

幼少期は、ある程度の力の説明
子供時代は、ある程度の力の使い方を覚えていく時間
そして、十歳で学校編を始めたいと思っています。
今のところ、予定なので、そこまで、たどり着くのにどれだけかかるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

誤字脱字感想などがありましたら書き込みをいただきたいです。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明（前書き）

ふむ、もう題名があれな感じですが。
書きたくなったので、今日二話目です。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明

―妹よ

―なに、お兄様

―この文字はなんて読むんだ

―これは、火炎球みたいです、古呪魔法＞ルーンスペル＜で言うところのファイアーボールだと思うのですが

―マジか、何でこれが中級魔法になってるんだ、ファイヤーボールなんて火属性の基礎の基礎じゃなかったか？

―それが、今のレベルなんだからしょうがない、でもそのおかげで、魔法が使えるかもしれないんだから文句を言わないで

俺達が、書庫にこもるようになってから一ヶ月くらい経っていた。今では、お父様が出かけるとドロシーが、書庫の前で俺達を待っていてくれるくらいである。

ちなみに、俺達がもともと使っていた魔法は古呪魔法＞ルーンスペル＜と呼ばれていて、今は、古代研究を生業にした学者達が調べる程度のものに成り下がっていた。
ちなみに、古呪魔法＞ルーンスペル＜は力ある文字、古呪に魔力を込め、発動させる。「我放つ聖光の一撃」《セイクリッド・ブラスト》なんかがいい例だと思う。
つまり、力ある文字で事象を改変するそれが俺達が使っていた古呪魔法＞ルーンスペル＜であった。

今現在、魔法と呼ばれているのは、魔方陣に魔力を流し込んで使う系陣魔法＞エレメンタルスペル＜呼ばれるもので、魔法であり魔法陣に魔力を流し込む事で、魔法を発生させるようだ。
ちなみに、魔法陣を作り出せるほどの力量を持ったものはほとんどいないため、新魔法が一年に一個できればいいほどだといわれているらしい。
系陣魔法＞エレメンタルスペル＜の、よい所をあげるなら、古呪魔法より圧倒的に魔力の消費を抑えることができるようになったことらしい。
たとえば、同じファイヤーボールを使うだけでもその魔力の消費量は、半分以下だというわけだ。
そしてもうひとつは、魔力さえあれば誰でも使うことができるということらしい。
もちろん、一人一属性という原則は生きているらしいのだが、魔法の質を大幅に落とした結果、中級魔法程度までなら誰でも使えるらしいのだ。
もちろん、上級魔法はその系統保持者にしか扱えないそうなのだが。
中級魔法程度は、その強さは込められた魔力の量で決まる、魔力を一必要とする魔法に十をつぎ込んでも威力が十倍になることは無いが、大体半分の五倍程度にはなるらしい。
まあ本来は、こんな魔力の無駄をするくらいなら、己の系統を極めたほうが早いので、こんなことする馬鹿はいないそうなのだが。
俺は、今、自分の系統を失っており、その馬鹿のことをできるだけの魔力があった。
これは、試してみる価値がありそうだと心に刻んでおく。
まあ、今やることは、この大陸文字を完全に読めるようになることだが。
なに、読めているじゃないかって。
これは、妹と二人で、一ヶ月間「古呪文字読解」とゆう辞典を片手に、ウンウンうなった成果だ、古呪文字は読める俺達だったが、三

千年経って公用文字が大陸文字と呼ばれるものに変わっていたのだ。
なに、なぜ大陸文字の辞典じゃないのかって。そんなもの読めるか、古呪文字で書かれている辞典がこれしかなかったから、古呪文字から逆引きしたんだよ。
おかげで、ある程度覚えるまで一月もかかってしまった。
とりあえず、しばらくは部屋で子供用の童話でも読んで、読解力をつけようか。
サクラは、積極的に辞典を開いていたせいで、軽い学術書程度なら読めるようになってしまったようだが、さっきの知識もサクラから教えてもらったものだ。

まあ、とりあえずこれで方針は決まった。
サクラは、魔力保有量を増やすことだ、体力の問題もあるにはあるが、今の身体ではどうがんばたって限界がある、それなら体力のほうは体の成長任せで、魔力を少しでも増やしたほうがよいだろう。
とりあえず、今は、系陣魔法＞エレメンタルスペル＜の練習もかねて、魔術書「悠久の闇」を片手にぶつぶつやっている。
何個か、魔力保有量を増やす方法はあるのだが、はっきりいって、魔法を使い続けるて魔力を空にする、それを繰り返すのが一番危険性が少なく身体への負担も低い、サクラは今のまま思ったとおりにやらせるのが一番いいだろう。
もちろん、積極的に遊びに連れ出した体力をつけさせるのも忘れないが。
俺は、そうだな、さっさと文字を覚えてこの世界の勉強でもするか。
なんかお父様の書庫を見てたら「魔王と勇者についての考察」なんて、気になる題名の本何かもちらほら出てきたしな。
後は、この有り余る力をどうするかな、いやまじでどうしよう、三歳児なのに素手で林檎とか握りつぶせるんだぜ。

とりあえず、力の制御と、勉強だな。

いやー、勤勉だね最近の三歳児は。

考察する三歳児と、わずかに見えた光明（後書き）

えーと、わざわざ評価ポイントを入れてくださった方、本当にありがとう御座います。
感想などもいただけると嬉しいです。
それでは、誤字脱字感想などお待ちしております。質問でもいいですよ、それがいいインスピレーションになる場合もあるので。

心配性な親達（前書き）

今回は、つなぎなので短いです。

心配性な親達

「クレア、サクラ、体力が有り余っているなら、ドロシーと一緒に村に遊びにいくといい」

お父様の、そんな一言で、俺達は村に行くことが決まった。
まあ、ドロシーも俺達が生まれる前は、村の子供と遊んでいたらしい。
母上様が、俺達を身ごもった時点で、母親の暇つぶしに、散々勉強や裁縫などを叩き込まれていたらしく、しばらくは村にはいっていないそうだが。

「シルクちゃん元気かなー」

といった感じで、同い年の村の友達に思いをはせている。

「そうですね、お父様、ドロシーも楽しみにしているみたいですし、同い年の子供達と遊ぶことが一番手加減を覚えるのに最適ですものね」

「クレアとサクラ、難しいことは考えなくていいから、子供らしく楽しんできなさい、ドロシー二人を頼むよ」

お父様が、苦笑を浮かべながら俺をいさめてくる。
事実、最近子供らしい振る舞いが少なくなったなー、と喜んでいいのか寂しめばいいのか、困っているお父さんであった。

「「「はい、わかりました」」」

俺と、サクラ、ドロシーの三人で異口同音に返事をすると、村に向かって駆け出していく。
それを見送るために玄関に出てきた妻に、愚痴り始める旦那そこにいた。

「はあ、成長が早すぎるのも問題だな、最近はぼくの書庫の蔵書もほとんど読みきってしまったようだし、最近は二人で隠れて魔法の練習もしているみたいだしな」

「いいじゃない、私は楽しみよ、クレアは私に似て魔法の才能はあんまり無いみたいだけど、サクラはまるで、魔法に愛されているみたいな成長速度だし、クレアもクレアで、三歳で林檎をつぶしてしまうほどの力持ちよ」

「なに、それは知らなかったな」

「サクラは最近は、古呪文字に興味があるみたいね、全部ドロシーから聞いた話だから、たぶん正確よ」

「あはは、三歳児に古呪の魔法を使われてしまったら、世界中の考古学者が卒倒してしまうな」

家の前、二人並んで子供達を見送る母と父、少しだけ寂しげな表情を浮かべながら子供達を見送っている二人であった。

失際は、使えるどころか超一流といってもよい腕前なのだが、その辺は知らぬが花である。

「それで、マリアナとカーリアが来るのは、今晩だったっけ」

「ええ、昨日近隣の村までたどり着いたって連絡が来たわ、今日中にはたどり着けると思うわよ」

「そうか、あの二人と会うのも久しぶりだな」

「そうね」

子供達が、見えなくなったのを確認して、ゆっくり扉を閉める二人、その背中にはさっきまでの寂しさは微塵も無く、久しぶりに会う懐かしい友に心をはせていた。

心配性な親達（後書き）

短めなので、気力があれば今からもう一話書く予定です。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹（前書き）

ふう、無事に書けました
といっても二話で三千文字言ってないと思いますが。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹

「ドロシー、久しぶりだねー」

といってドロシーに抱きついたのがシルクちゃんのようだ、赤い髪に日焼けした健康的な肌が印象的な女の子だ。

「ど、ドロシー、ひ、久しぶりだな」

と、どもっているのはカルマという金髪の男の子だ、ドロシーとシルクと同じ八歳で村の子供達のガキ大将みたいな存在みたいだ。

「ドロシー姉ちゃん、お久しぶりです」

「ドロシー姉さま、お久しぶりですね」

このませた二人は六歳、銀髪の男の子で、外で遊ぶより家の中で本を読んでいたいと身をもって表現しているクレス、具体的には岩に座って手に持った本から挨拶の時しか目を上げなかった、と蒼髪の女の子で元気いっぱいのフレス、立ち振る舞いは淑女を目指しているように見えるが、どこか落ち着き無い、今にも走り出しそうな印象なフレスだった。

「こ、こ・・・んにち・・・は、アルマで・・・す」

この挨拶は、俺達と同じ三歳のアルマだカルマと同じ金髪でカルマの妹らしい。

どこか、おっとりとした女の子で人見知りらしい、ちなみに今はカルマの後ろからこちらをチョコチョコ伺いながらの挨拶である。

なかなか、可愛い女の子がこんな動きをしているのを見ると、もう、お兄さん悶死してしまいます。
ま、同い年なんだけどね。

と、いう感じでこの五人が今この村にいる九歳以下の子供らしい。
ん、なぜ九歳かって？
俺達の村では、九歳になると二年間、村の大人の誰かについていろいろなことを学ぶことになっているからだ。
ちなみにこの村、フラグレス村は住んでいるほとんどが元冒険者というかなり特殊な村である。
もともと、冒険者の間で有名だったお父様が、国から爵位と何も無い土地を貰ったときに、そこに引退した冒険者達が集まってきたできたんだという話である。
そのため、この村の住人は皆、それぞれ冒険者スキルを持ったものばかりであり、九歳になったら自分にあった師の元で一年間びっちり勉強する制度ができたのだという。
ちなみに、ほとんどのものは十一歳になったら王都グラマリアスの学校などに進学するのだが、進学せずに成人の十六歳まで師の下で従事する人もいるんだとか。
進学組にしても、その一年間で冒険者としての基礎を散々叩き込まれるため、ほかのところから来た子供とは段違いの成績を誇るそうだ。
まあ、俺とサクラ、ドロシーの三人はそれぞれの親に従事するだろうことは目に見えているので、あまり気にしたことは無いが。
そんなことは、今はおいといて、俺達も挨拶しないとな、とりあえずドロシーから。

「みんな、久しぶり、アルマちゃんははじめましてかな？」

「は、はう」

と、俯きながら返事をする、アルマちゃん、可愛すぎです。鼻血出そう。

「サクラと申します、皆様よろしくお願いいたします」

と、身悶えているとサクラに先を越されてしまった、む、しかもサクラのやつ軽く「魔王の魔眼」使っていやがる。
あぁぁ、みんな、ほほ染めちゃって、見とれてるよ。

じゃ俺も、えん慮無く使いますか。

「皆さんこんにちは、ぼくの名前はクレア、サクラの兄です、これからよろしくお願いいたします」

「魔王の魔眼」を発動して皆の顔をゆっくり見回してから、ぺこりと頭を下げる。

―ふっ、ちょろいぜ

―ええ、ちょろいですねお兄様

―この分なら

―ええ、この分なら

――すぐにお友達になれるな（なれますね）！！！！

どこか徹底的に考えがずれている気がする兄妹であった。

村の子供達と、どこかずれてる兄妹（後書き）

毎日チョコチョコ更新していきます。
いつ終わるのやら。

誤字脱字感想などぜひ書き込んでください。
作者そのままやる気に直結する単細胞なモノで。
だめなところでもぜんぜんいいですよ。
ちゃんと見てくれているのがわかって逆に嬉しいです。
別に、Mではないですよ。

駆ける双子と、翻弄される子供達（前書き）

幼少期初めての戦闘編（笑）です。
まあ、ぶっちゃけ鬼ごっこですね。

駆ける双子と、翻弄される子供達

―妹よ

―はい、お兄様

―シルクが、前方にある岩場の後ろに隠れている、フレスは右の林の中を疾走中、アルマは花畑の方で隠れているのが見えているが、とりあえずは最後にしようと思う

―そうですね、こちらは藪の中でクレスが隠れて本を読んでいるのが見えますね、それと草原のほうをドロシーとその後ろをカルマが走っています

―そうか、とりあえずカルマには罠でも仕掛けておくか、まずは林の中のフレスだな

―ええ、そうですね、私よりお兄様の方が足が速いので、回り込んでください、私は後ろから追い込みます

―ああ、わかった

【以心伝心】にそう送り込むと、俺は身を隠すように走り始める、特にフレスには気づかれないように用心して走り出す。

サクラが、追っかけているはずのフレスの前方、意識が向いていない場所に回りこむと、

「フレス姉、捕まえたー」

笑顔で、フレスにタッチした。

「な、なんですって、・・・・・・まあ、あいては三歳ですし手加減ですわ」

絶対、そんな気持ちは微塵も無いだろう真剣な表情だったくせにフレスは、そんな負け惜しみを言っていた。

―妹よ、シルクに動きは

―まだ、岩場の後ろです

―わかった、林の方に誘導してくれ

―わかりました

そう返事をしたサクラが林から飛び出した岩場を迂回していくのが見える。

しばらくして、岩場のほうからシルクが、その特徴的な赤毛をなびかせてこっちに向かって走ってくるのが見えた。

俺は、ちょうどよい茂みを見つけると気配を殺してしゃがみこんだ。

タタタ、バサッ、

「シルク姉さん、つかまえたー」

茂みの横を通り過ぎるのを見計らって、茂みから飛び出すとシルクを捕まえる。

「へ、クレア君！まさか、誘導されたの？」

びっくりして放心しているシルクをほおって、近くの藪に隠れていたクレスにタッチ。

「クレス兄、みっけた」

「・・・・・・・・・うん」

少し顔を上げて、口元に笑顔を浮かべるとまた読書に戻っていくクレス、本は好きだが、遊ぶことも一応嫌いではないみたいだ。

ーさて、アルマ最後だから、次はカルマだな

ー先ほどドロシーから離れて、草原を花畑の方に走っていきました

ーむ、花の冠でもプレゼントする気か、サクラは気配を消してドロシーの後ろで待機、俺もすぐ行く

ーわかりました、まあ、見通しのよいところで体力勝負になったら流石に勝ち目が無いですしね、ここはせいぜいこの体躯の小ささを生かさせてもらいますか

ーああ

そう送ってから、静かに駆け出す、後ろのほうから三人分の驚いたような気配が伝わってきたが、今は気にしない。

そう、今は人の恋路を、

ー一邪魔したい（です）。

以心伝心な二人が、草原の真ん中でポケーとしていた、ドロシーの近くに潜伏してしばらく経った。
その手に、小さい花束を作ったカルマがこちらに向かって走ってくる。

「ドロシー！」

―お兄様、カルマが戻ってきました

「どうしたの、カルマ君、こんなところで待っていてって？」

―ああ、見えてる、俺はカルマの背後に回りこむ、サクラはドロシーを頼む

「そ、その俺、ドロシーのことが」

―青春ですね

「ん、私がどうかしたの？」

―まあ、今はラブコメより、鬼ごっこだ、この世は戦争、油断したほうが悪い

―お兄様、声が乱れていますよ

「お、おれ」

顔を真っ赤にして、一生懸命深呼吸しているカルマの後ろにそっと忍び寄る。

「うん」

「ドロシーの、ことが、・・・・・・す「カルマ兄ちゃん、つかまえたー」」

「クレアさま!?え、いつの間に「ドロシー、つかまえましたわ」」

真っ赤な顔のカルマの後ろには、俺が、呆けているドロシーの後ろにはサクラが立っている。

「さて、後はアルマだね」

「さっきお花畑の方で、隠れているのが見えましたわ、兄さん」

そう言って駆け出す、俺とサクラ呆けている二人を置き去りに、あ、ちゃんとカルマに捨て台詞も忘れない。

そっと、近づくとカルマにしか聞こえないようにボソッと。

「ドロシーは、そう簡単には渡さないよ、カルマ兄ちゃん」

小悪魔の笑みを残して俺はサクラを追って走り始めた。

花畑の方で、二人分の歓声が上がったのは、それからしばらくして、カルマがクレアの言葉の意味にようやく気づいたころの話であった。

「何なんだ、あの二人は」

信じられなかった、鬼ごっこが終わってつかれきったのか、ドロシーの膝枕でアルマと一緒に寝てしまった兄妹が俺達を全員捕まえてしまったってことが。

確かに、俺はドロシーに久しぶりに会って、可愛くなっていたドロシーを見て完全に舞い上がってしまっていたが、これでも俺は、冒険者である親父とお袋の息子だ、野生動物などの気配は敏感だし、心ここにあらずでも三歳児のスピードを交わすなんて簡単なことだった。

もちろん、それじゃゲームにならないから、十分力量差を見せ付けた後はわざとつかまってやるつもりだったが、この二人はそんな俺を軽くつかまえて見せた。

ほかのみんなも、妹のサクラのほうに追っかけられているうちに、なぜか前にいた兄に捕まってしまったというし。

「うん、私もびっくりしたよー、サクラちんから逃げてたら、いつの間にか隣にクレアちんがいるんだもの」

てな、感じだ。

何なんだこの兄妹、特に兄の方、最後の言葉は間違いなく俺に向けて放たれたものだった。

ドロシーは渡さないだと、本当に何なんだこの兄妹は。

「すごいよねー、クレアさまとサクラさまには、いつもビックリさせられるよー」

そんな、感じで軽く話し始めたドロシーの言葉に年長組みは、あり

えないものを見たような表情になったのだが、それはまた別のお話。

駆ける双子と、翻弄される子供達（後書き）

ちなみに、なぜ二人が鬼なのかというと、立候補したからです。
三歳児なので二人一セットで、といった感じですね。

感想誤字脱字がありましたら書き込みお願いいたします。
あと、あらすじを少し変えました報告しておきます。

お客さんと、露見した片鱗（前書き）

ＰＶが８０００、ユニークが１０００を越えました
皆様、ありがとう御座います。

お客さんと、露見した片鱗

―妹よ

―はい、お兄様

―誰だ、こいつら

―お兄様が知らないのに私が知るはずがありません

カルマやドロシー達と散々遊び倒して寝てしまった俺達、起きてみれば、時刻はもう夕方であり、俺達はそれぞれ帰路に着いたのであった、が、ドロシーとサクラ、俺の三人が家に帰ってきてみると、父親達と楽しそうに談笑している知らない二人組みがいた。

「おお、これがメアリィとクオーツの子供か、似てないな」

そのうちの一人、綺麗な金髪に長く尖った耳、綺麗な瞳は緑の光をたたえている。

長命種と呼ばれる種族であり、まあ、簡単に言えばエルフのお姉さんだ。

実際は結構珍しい種族なのだが、長く転生を繰り返していれば一人や二人であってはいるし、長く生きる彼らだ、中には転生した後も会ったなんて笑い話もある。

それでも、魔王であり、もともと魔族以外の種族との接触が少なかったサクラはもとより、ドロシーもその可愛らしい頬を朱に染めて彼女の顔に見とれている。

「ふふ、女の子二人は、アイウスの美貌に見とれているみたいだけ

ど、男の子に振られちゃったみたいだよ」

アイウスと呼ばれたエルフのお姉さんに、茶々を入れたのは、蒼髪で女性用のローブを羽織った魔女、その立ち姿からなんとなくお父様の妹なのではないかと推測する、つまり俺から見たら叔母さんにあた人だな。

「クレア君、おばさんって言ったら、許さないわよ」

―おお、心を読まれた！

「どうしたの、キャシー」

不思議そうに、首をかしげているアイウスさん。

―お兄様、思いっきり声が出ていましたが

―なんだと！

「まあ、いいや、こんにちはクレア、サクラ、ドロシー、クオーツの妹のキャシーです」

おお、何とか流してもらえたようだ、何もしてないけどな。

「こんにちはー、私は三人の親友のアイウスです」

と、改めて、自己紹介をしてくれたキャシーさんとアイウスさん。ちなみに、アイウスさんが言っている三人というのは、キャシーのことではなく、ドロシーの母親のマリアのことである。もともと、五人は冒険者時代にクランを作っていたのだとか。

「「「こんにちは」」」

三人そろって、ご挨拶、やっぱり挨拶って大切だよね。

「キャシー、アイウス、挨拶はその辺でいいだろ、みんなでご飯にしよう」

はい、ここでストップが入りました、犯人はクオーツことお父様です。

「そうね、ドロシー、マリアの準備を手伝ってあげて、二人は着替えておいでなさい泥んこじゃない」

そしてそれに追従するメアリィこと母上様。

「「「はい！」」」

もう一度、一糸乱れぬ返事をした後、俺達はそれぞれの場所に向かって駆け出していった。

「それで、さっきの話の続きだけど」

子供達が、駆けていったあと、私はさっきまでも話題に戻ることにした。

「三人に、ギフトがついていないか調べてほしいっていうのね」

ギフト、神々の祝福にして加護とも呼ぶべきもの、上神クラスがついている子供は本当に稀だ、たとえ下級神の加護であってもその力はあのどれ無いものがあるし、ましてはそれが大天使クラスや女神クラス、上神クラスだったら物によっては災害と言ってもいいレベルの物になる。

「ああ、戻ってくる前に確かめて起きたい」

兄さんの表情はいつに無く真剣だった。

「はあ、わかったは、でも何もついて無くても落ち込まないでね」

そういって、私はその魔法をつむぐ、長年かけて私が使えるようになった唯一の古呪魔法。

【我が前に、かの物の加護をさらせ】＞マインドサーチ＜

「ついてないほうが、どんなに良いか」

そんな、兄の呟きが私の鼓膜にこだました。

「ドロシーは、【プリメラの加護】妖精プリメラ、人のすぐ傍で生活し、たまに悪戯していく、主に家事などが得意となる加護だ」

まあ、マリアも同じ加護がついているはずだし、それはあまりおかしくない。

次は双子ちゃんだね。

「クレアには、【魔王の同化】」

「サクラには、【勇者の浄化】」

「そして、二人とも【転生神の寵愛】がついている」

そういってから、魔法を解くと唖然とする三人の顔を見回す。多分、私も兄さん達と同じ表情をしていると思う。

「ねえ、兄さん、なにやったの？」

とりあえず、【転生神の寵愛】は置いとくとしても、残りの二つが意味不明だ。

この子達は、何をしたらこんなめちゃくちゃの状態で生まれてくるのだろう。

そう思いながら、絶句している三人に最後のとどめを刺した。

「あと、私の力では読み取れないものが何個かあった気がする」

「「「つまり？」」」

「あの子達の加護は、これだけじゃないってこと」

私達四人の、表情は彼らが着替えて来るまではれる事は無かった。

お客さんと、露見した片鱗（後書き）

だんだん、大人たちに気づかれ始めております。
まあ、いいですが。

感想誤字脱字などがありましたら書き込んでいただけると嬉しいです。
ありすぎて指摘できないよ、という方、チョコチョコ治していくつもりなので根気強くお付き合いください。

三歳からはじめる、ギルドの依頼（前書き）

某書籍風に、ってかんじで、三十歳でも保健体育でもありませんが。
三歳なのに、ギルドです。

三歳からはじめる、ギルドの依頼

―妹よ

―はい、お兄様

―今日は、稼ぐぞ

―当たり前です

「チョット待て、そこの双子、まだ依頼を受けてないし、お前ら三歳組はギルド登録もしないといけないんだ、おとなしく座って待っていろ」

さっさと行こうとしていた俺達に、カルマからストップが入った。何だ、何だ、ちょっと年が上だからって生意気だぞ。

「クレア、お前今結構失礼な事考えているだろ」

と、いうカルマは置いておいて。

なぜ、いきなりギルドなのか不思議な方もいるだろうから説明しとこう。

まあ、ギルドの説明は軽く、この大陸の格貿易主要都市に存在し雑多な依頼をこなしていくのがギルドだ。

細かく分ければ、商業ギルド【カンパニー】鍛冶ギルド【アルテミス】冒険者ギルド【ラグーン】などいろいろあるのだが、三歳の俺にはギルドと覚えておけば十分だって気がする。

さて、ここでなぜ貿易都市ではない、このフラグレス村にギルドがあるのか不思議な人もいるだろう。

まあ、簡単に言えばここが冒険者の村だからだ、引退していようが腐っても元高名な冒険者がたくさんいるし根無し草だった冒険者が拠点としてこの村を使うのも珍しくない。
そのため、この村にはギルドがあるし、この村の子供達はそのギルドを使って小遣い稼ぎをしているのである。
まあ、この村に来る依頼は、村の中から俺達のような子供のために簡単な依頼が来るか、外から凶悪な依頼が来るかのどちらかなので中堅者の冒険者はあまり近づかなかったりするのだが。

「おーい、クレア、サクラ、アルマ、さっさと来い登録を済ませるぞ」

おや、カルマがお呼びだ、しょうがねーな、いってやるか。

「それでは、この水晶の上に手を置いてください、ちょっと痛いので我慢してね」

「ふえ、痛いの、や」

最初のアルマ、いやー、そのビクビクオドオドかわいね。おにーさん悶えちゃうよ。

あれ、受付のおねーさんがその様子を見ながらハアハアしてるんだが大丈夫なのか。
いつも、この瞬間はたまらないわ、っておい。

「おし、次クレア」

ぐずっているアルマの頭をなでながら、カルマが俺を指定。
はい、こちらですよー、と、なんとなくいやな笑みを浮かべている

おねーさんの前まで歩いてく。
まあ、そのせいでちょっと緊張していた俺にはその気配を気づくことができなかったんだ。

「じゃあ、おねがいしま「てやーー」」

ーーえ？

いきなり、妹の思考と直結したと思えば水晶のうえにはもうひとつ見慣れた小さな手がおかれたいた。

「ち、ちょっとシルク姉さん？」

戸惑う、俺とサクラを置き去りにして発動しかけていた水晶がフル稼働。俺達の身体を生態電流の波が駆け抜ける、確かにこれはかなり痛い、足のつま先から頭のてっぺんまで静電気がかけ抜けていくと言えばいいか。

「はい、終わりました」

どこか、あきれた様子のおねーさんが二人分のギルドカードを渡してくる。

「ところで、君達、二人ががりって言うイレギュラーがあったとはいえ、三歳で称号もちとか化け物ですか」

渡しながら、そっと俺達の耳元に話かけて来るおねーさん、まあ、ほかの人には黙っといてあげるよ。
って、いい笑顔で水晶をしまいはじめた。

俺達は、なんとなくいやな予感を覚えつつも自分のカードに魔力を流してみた。

クレア　【魔天の片翼】

サクラ　【聖女の片翼】

ああ、確かに二人で水晶にてをおいたりしなければ、きっと出なかったですね。

いまさら、遅いと思いながらも、俺達は絶対誰にもカードを見せないと心に決めたのであった。

「おーし、じゃあ、皆カード持ったし依頼受けるか」

「今日の、お小遣い依頼は、お祭りの材料集めでしたっけ」

「あはは、まさか成功するとは、二人ともごめんねー」

一人笑い転げているシルクを除いて、話を進めていく年長組の二人。

「なら、シルクとカルマ君がいますし、ほかの子は特に武器なしでもいいですね」

「ああ、ちゃんと守るから任せておけ」

なかなか、頼もしいカルマに笑いかけるとドロシーが、みんなに号令をかけた。

「じゃあ、みんな【祭りの材料集め　子供の分】の依頼に出発するよ、いいかなー？」

「「「「「はい！」」」」」

こうして俺達は、ギルドを後にした、目指すは【祭りの材料集め子供の分】、なげーよ。

歩き出しながら、俺はふと思った。

―なあ、妹よ

―はい、お兄様

―俺達、称号逆じゃね？

―いまさらですよ、お兄様

子供の集団の最後尾、妹のため息が静かに虚空に消えていった。

三歳からはじめる、ギルドの依頼（後書き）

はい、まあ、無茶振りはわかっていますよ。
でも、今書きたかったんですもの。

感想誤字脱視を書き込んでいただけると嬉しいです。

探索する子供達と、どこか不幸な双子（前書き）

ＰＶが１００００、ユニーク１４００を越えました皆様ありがとうございます。
今回は初めての依頼続きです。

探索する子供達と、どこか不幸な双子

「クレスー、これは使えるかな」

「シルク姉さん、マタタビなんて持ってきてどうするんですか」

「クレス、こちらは使えるかしら」

「フレスそれはシルフィの効用草だね、これは依頼よりも普通に売ったほうがいいと思うよ」

「クレス、樫の木はこんなもんでいいか？」

「カルマ兄、この系統の依頼受けてるの、今年はぼく達だけだろうから多めに持っていったほうがいいんじゃないかな」

「クレス君、紅茶はいかが？」

「ああ、ありがとうございますドロシー姉さん」

これは、ぼくらの依頼の光景である。
普段は、内向的なクレスだが、薬草などの植物の知識においては大人顔負けであるようだ。

―妹よ

―はい、お兄様

―出番が無いな

―はい、お兄様（泣）

妹も、心の中で泣いているようだ。

さてと、冗談はこの辺にしておいて、俺達も仕事をしていくか、これもお小遣いのためだしな。

と、俺はすぐ近くに群生していた薬草らしき物をせっせと集めはじめる。

ちなみに、お祭りに薬草が必要な理由はただひとつ、酔いざましだ。

可愛い、妹もとてとてと木の枝を拾い始めた。

「クレス兄さん」

「どうした、クレア」

普段と違って、珍しく笑顔のクレスがこっちを向いた。

「この、薬草みたいなのは使えるかな？」

「どれどれ」

そして、知識の海の中から、俺のもって来た草を探し始めるクレス。

「なあ、クレア」

「うん？どうしたのクレス兄さん」

「君は、酔っ払った大人を虐殺したいのかい？」

「へ？」

こちらと、毛頭そんな気持ちはなく、はてなと首を傾げる俺。
クレスも、三歳だからな、と、呟いてから俺のもって来た薬草らしきものの説明をしてくれた。
「これは、アンジャッシュの香り草っていってね、この草の成分を注質したら、すごくいい香りの香水ができるんだ」
「ふむふむ」
なんだ、とってもいいものじゃないか。
「ただね、どういうわけなのかはわかんないんだけど、薬草と混ぜるとものすごい毒素を排出するんだそうだ・・・」
「ごめんなさい」
うん、わかればいいんだ売れば結構いい値段になるしね、俺を攻めるわけでなく、のんびりと解説してくれたクレスなのだった。
ただ、その余裕が続くのは数秒後までだったのだが。
「クレス兄様、枝を集め終わりました」
「うん、ありがとうサク、・・・サクラさん」
「はい、どうしましたか」
はい、妹が何かやらかしましたか。

「いや、君ら二人とも狙ってもってきてるんじゃないよね」

「「はい？」」

なにを、言っているんだ、俺もこれ以上毒草になってしまうものを集めるわけにはいかづ、サクラの手伝いをしていただけなのだが。

「まず、サクラ」

「はい」

「君が集めてきたのは、大半が香り木と呼ばれるものなんだ」

「はあ、いいにおいがするのですか」

心底いやそうに、サクラの質問にクレスは答えてくれた。

「ドリアード枯れ枝と呼ばれるものでね、一般にお香などに使うものなんだけど、そのにおいの効果がね・・・・・・ 気持ちよくなることなんだそうだ」

子供達の中には首をかしげているものもいたが、主に耳年間なドロシーとフレスが、真っ赤な顔をしている。

三歳で精神的に幼児退行していても、知識は残っているためその言葉にすぐ思いあたったサクラは、ものすごい勢いで集めた枝をぶん投げていた。

「で、次にそこで笑っているクレス」

「うん、ぼくが何か」

「君が集めているカリンの枝はね」

「うん」

「・・・・・・燃えないんだ」

今回の依頼、酔い覚ましようの薬草を集めること・祭りで使用する薪を集めること。

意味無いじゃん、カリンの枝！！！！

その後、顔を真っ赤にして枝を投げる幼女と、どこか悲しげに枝を投げる男の子姿が見られる、不思議な光景があったそうな。

探索する子供達と、どこか不幸な双子（後書き）

もうちょっと、後お祭りの説明で三歳編が終わります。
次は、五歳編を書いていこうと思っています。

誤字脱字感想ご意見などお待ちしております

依頼完了?不幸が続く双子（前書き）

依頼終了、今回は換金します。

依頼完了？不幸が続く双子

「シルフィの効用草は、フレスちゃんですね、五枚一束で四束ありので銅貨４０枚ですね」

「ありがとうございますわ、アクア姉様」

「えーと、次はカルマ君、樫の枝五十本っと、これは依頼品ですねカルマ君の報酬にちょっと色をつけときますよ」

「うん、ありがとう」

「ドロシーちゃんと、アルマちゃんがそれぞれ眠り草を五束づつ、うん、これで今回の依頼は達成ですね」

「「はい（・・・は・・・い）」」

「えーと、後はシルクちゃんのマタタビ三束とクレス君のマリスの野苺、シルフィの毒消し草ですね」

「「はい（はいなー）」」

「シルクちゃんは、マタタビの代金銅貨１０枚、クレス君は合計して銅貨５０枚です」

「「ありがとうございます」」

「えーーー・・・・・と、最後に双子ちゃん」

「「・・・・・・・はい」」

「どこで拾ってきたのこれ？」

「・・・・・・・森で」

「あの森にこんな凶悪な植物、原生していなかったと思うんだけど」

「・・・・・・・」

俺達が、カリンの枝とドリアード枯れ枝を捨てた後、事態は悪化の一歩をたどった。

あの後、数回同じことを繰り返して、最終的に持って帰ってきたのは。

サクラ　人面樹の右腕？、呪怨樹の根っこ、妖狐の紅梅香の枯れ枝

クレア　樫の枝（水精霊憑き）、宝樹の枝（対火耐性）、カリンの枝（不燃物）

カリンの枝はいつの間にか紛れ込んでいた、何かもう呪われてんじゃねとしか言いようが無いほど、散々な結果だった。

さすがに、呪怨樹の根っこなどはサクラも捨てる気にはなれ無かったようで、しょうがないのでもって帰ってきたというわけだ。

クレスなんて、最後のほうは呆れ通り越して顔引きつってたし。

「まあ、君達がうなだれているわけもなんとなくわかるんだけど、

報奨金は君達が一番多いよ」

アクアさん、慰めてくれるのは嬉しいけど俺達は普通に依頼をこなしたかったです。

「クレア君は、金貨１枚、サクラちゃんは銀貨３０枚だね」

ちなみに、お金は、玉貨・銅貨・銀貨・金貨・白金貨・幻想貨とあり、価値的には玉貨が１００枚で銅貨になり、それぞれ１００枚づつ次の貨幣に繰り上がるようになっている。
普通の一般人が一日に稼ぐのが大体銀貨一枚といわれているため、俺達は三歳なのに一日でその３０倍と１００倍の金を稼いだことになる。

のだが、俺達は落ち込み続けていた。

―なあ、妹よ

―はい、・・・・お兄様

―俺達に、普通の生活というものは満喫できないんだろうか？

―私も、それが言いたいです。

俺達はとっても悲しくなった、酔い覚ましと薪をとりにいったはずなのに、もって帰ってこれたのは呪われた枝と不燃物のみ、くそ女神さま俺達に平穏は無いのか？

「ええと、双子ちゃんとアルマちゃんは今日が初日でしたね、これは初依頼成功のプレゼントです」

気を使って、くれたのかアクアさんが、受付の中から小さなポーチのようなものをごそごそと取り出す、いまさらかもしれないが、アクアさんは、俺達の登録の時に苦痛の表情を恍惚とした表情で見ていたおねーさんだ。

「「「「・・・はい・・・ありがとう・・・ございます」」」

くしくも、普段どおりのアルマちゃんと、落ち込んでいる俺達のしゃべり方は完全に同じだった。
アクアさんもさすがに引きつった表情で俺達、一人一人にそのポーチを優しく渡してくれた。

「それじゃあ、みんなこれからもがんばってね」

「「「「「「「はい！（・・・はい）」」」」」」」

その返事とともに、俺達はギルドから帰還した、俺達の金は多過ぎたから、みんなと分けようと思ったんだけど、自分がとったものは自分のお金とするべし、と断られてしまった。

これが俺達の初依頼、依頼の報酬は人数分で銅貨１６０枚だったのに、俺達双子の換金して得たお金は銅貨１３０００枚分だった。

―とりあえず神様、三歳でこんなにお金は要らないんだが

―激しく同意です、お兄様

―まあ、いいだろう明日からはお祭りだし、お金を使う機会もあるだろう

―ええ、そうですね、お兄様

そう思念を飛ばしてから、お金をとりあえず入れておいたポーチを、腰のベルトにくくりつける、サクラはいつもどおり母上様の趣味のゴスロリ姿なのでサクラの、ポーチも一緒にくくりつけた。
金貨銀貨１３０枚はいっているのに、そのポーチはまったく重みを感じさせなかった。
満足げに、うなずいて歩き出す。
このお金は、お祭りの間にすべて使い切ってやるという決意を、二人分、小さい胸に抱いた俺達はゆっくりと帰路に着いた。

ぼく達は、知らなかったんだ、お祭りで必要とするお金は、多くても今日フレスたちが稼いだ程度なんだってことを。

依頼完了？不幸が続く双子（後書き）

クレアがあんなに報酬が多かったわけは宝珠の枝（笑）です。
なぜ、子供が行くような森にそんなものが？不幸属性じゃないでしょうか。
まあ、簡単に言えば二人にはそういう類の祝福もついている（憑いている？）ってことです。
神の祝福がついている時点でラックは人より上ですから（笑）。

感想誤字脱字ご意見などありましたら書き込みお願いいたします。
次回からはお祭り編になる予定です。
三話くらいかなー

春の始まりのお祭り（前書き）

年齢のところで、修行期間を一年から二年に変更いたしました。

春の始まりのお祭り

新年祭、その名のとおり、新しい年を祝うお祭りであり、いろいろな、意味を持つお祭りでもある。
まず、ひとつ、このお祭りの時に生まれた日は関係なく、全員がひとつ年をとる。
この世界では、誕生日という概念はあまり無く、その日に皆、年をひとつ重ねるのだ。
つまり、このお祭りが、終わったとき俺達は、四歳になるというわけだ。

そして、この新年祭は別れの祭りでもある、そう、村の人々にとっても、俺達にとっても。
まず村単位で言えば、お祭りが終わった時十一歳になった子供達が、それぞれ、学校に旅立って行く。
そして、九歳になった子供達は、村の大人一人に従事して、十一歳になるまでの二年間いろいろな勉強をするのがこのフラグレス村の決まりだった。

つまり、見知ったところで言えば、シルクとカルマがお祭りの後から、子供達から離れ、冒険者達について修行期間に入るというわけだ。

ドロシーは？って、マリアさんについて家事の勉強をするらしいからいままでどおりだ。

しかし、このような別れがあればこの祭りは出会いの祭りでもある、引退した冒険者や、腰を落ち着けた冒険者が大体この時期を狙って流れてくるということもあるが。

今年生まれた子供達、つまりこのお祭りで一歳になる子供達のお披露目といった側面もこのお祭りは持っているという理由もある。

アイウスとキャシーの二人組は、お祭りが終わったらまた旅だつらしく、せっかく仲良くなれたのに残念と行った気持ちもあるが、今は新しくくる年を祝うことが先決だ。

ちなみに、この世界、一年の流れとしては、春の季節、夏の季節、秋の季節、冬の季節があり一期がそれぞれ９０日、一年で３６０日となっている。

場所によっては、それぞれ季節ごとのお祭りがある地域などもあるらしいのだが、このフレグラス村が大々的に祝っているのがこの新年祭であった。

―妹よ

―はい、お兄様

―財布は持ったか

―はい、新しく買ったベルトにポーチもくくりつけてあります。

そういうサクラの今日の格好は、いつのどおりのゴスロリドレスに、腰におしゃれな黒のベルトバックルを締め、ギルドで貰ったポーチをくくりて、といった完全?装備である。

―さて、いざ行かん、俺達の戦場に

―ええ、お兄様、わかっていますわ

この貰いすぎたお金を使い切る。
そう胸に決意した俺達は、それぞれ顔をあわすと二コリと微笑みあう。

さあ、決戦の始まりだ。

ガチャ、と、決意を胸に闘志を燃やしている俺達の部屋にドロシーが入室してくる。
そして、俺達の顔を見て怪訝な表情をすると。

「クレア様、サクラ様、お祭りは明日からでございますよ、今日はもうお眠りになってくださいませ」

そう、優しく俺達に忠告してくれた。
ああ、そうさ、知っているよ。
誰が、いまからお祭りだって言ったよ、ただ、何か興奮して眠れなかったんだよ。

「ああ、わかった」

「わかりましたわ、ドロシー」

とりあえず、そういって、布団に入る俺と、自分の部屋に戻るサクラ。

そして、ドロシーが部屋の明かりを消して自分も寝に戻った後も、しばらく屋敷の中を子供二人の思念が飛び交っていたそうな。

―あしたが、楽しみだな妹よ

―ええ、そうですね、お兄様

その思念だけは、年相応の感情を持ってフヨフヨと夜の闇に消えていった。

春の始まりのお祭り（後書き）

はい、次から本格的にお祭り編、かけるのかな？微妙です。

誤字脱字感想ご意見などありましたらどしどし書き込んでください
ませ。

お待ちしております。

少女のお買い物（前書き）

お祭り、何とかかけているでしょうか、といっても。
背景表現なんてこれポッチもしていない自身がありますが。

少女のお買い物

新年祭、喧騒の中、露天を出している冒険者らしき青年の前で、小さな少女がじっとひとつの商品を凝視していた。

じーーーーーっ

「お、お嬢ちゃん？、これに興味があるのか？」

じーーーーーっ

コクコク

首を縦に振っている目の前のお嬢さん、確かこの領地の領主であるクォーツ様の娘だったはずだ、その彼女がなぜか、私が珍しいからと持ってきた商品をじっと凝視している。

深遠祭で、その商品、多分魔道具なのだろうが、を売ってしまおうともってきたが、食いついてきたのがまさか、こんな小さなお嬢さんだとは、と内心苦笑しながらも、いままで、この道具を使いこなせる者はいなかったし、貴族の娘だしこの少女になら売ってもいいかなとなんとなく考えてみる。

「売ってやってもいいが、結構高いぞ」

「いくらですか？」

「ふむ、金貨一枚、いや、お嬢ちゃんにはおまけして、銀貨三十枚でどうだ」

まあ、腐っても魔道具だしな、がんばってまけてもこれが限界だな。
ま、こんな小さいこの子が手が出る値段ではないだろ、と、たかをくくりながら、私は赤字覚悟な値段を提示する。

「はい、わかりました」

と、少女は、腰のベルトにくくりつけたポーチをごそごそとあさりだす。

ははは、自分の宝物でも出すかのかな？など、その年齢に沿った行動を期待していた俺に、

「はい、銀貨三十枚です」

その少女は、ちゃんと使える銀貨三十枚を俺の目の前に出した。

「へ？」

「どうしたのですか、足りると思うのですが？」

その、予想外の行動に呆けてしまった、俺はしばらくして、相手が貴族のお嬢様だってことを思い出す。

さすが、お嬢様、普通の平民の月収の三十倍をぽんと出すとは。

「ああ、お小遣いかい？」

「いいえ、違います」

お小遣いじゃない？じゃあ、なんだ、すでにその年で、祖父か誰かの遺産でも継いでいるのか。
そんな疑問を浮かべている俺に、彼女はその答えを出してくれた。

「ここは、冒険者の村ですから、自分で稼いだお金です」

そういって、お金を俺の前に置くと、俺が売りに出していた魔道具の腕輪をその少女は楽しそうに腕にはめはじめた。

「さすがだな」

流石冒険者の村、たとえ貴族令嬢だろうと、たとえ五歳にも満たない幼子だろうと、その一人一人に冒険者の血が流れているというわけか。

「はい、ありがとうございます」

俺に対してそう一礼すると、少女は彼女の兄らしい子供の元へ、楽しそうにかけていった。
その表情は、歳相応の可愛らしいものだったが。

「まさか、買われてしまうとわ、な」

走りさる少女の小さな背中に、俺の呟きだけが追っかけていった。

「何を買ったんだサクラ？」

―結構、強力な魔道具のようだな？それは

「腕輪ですわ、兄さん」

―ええ、魔力を流すことによって、自分の属性武器になる特殊な魔道具のようです

「似合っているよ、サクラ」

―そうか、良く手持ち金だけで買うことができたな

「ありがとうございます、兄さん」

―ええ、もちろん魅了も使いましたが、相手が子供と侮ってくれたことと、何より、いままで、まともに使いこなせる人がいなかったのではないかと

表面上は、とても可愛らしい笑顔を浮かべる妹、俺にとっても、サクラがこれから生きていく中で、サクラに合った武器は必要だと考えていたので、この段階で、その候補ができたことは大変喜ばしいことだった。

「綺麗な、装飾だね」

装飾、いやその刻まれた魔法陣こそが、この腕輪の本質なのだろう。

―発動させなくても、武器形態はどんな物かわかりそうか？

「うん、よくわからないけどねー」

―無理ですね、最低でも、魔法陣を探るには微量の魔力の行使が必要でしょうから

「どんな、意味か今度しらべてみるか？」

―なら、それは今度にしておくか

「はい、兄さん」

―ええ、そうですね、お兄様

ふむ、あとは、この魔道具が、少しでもサクラの身の守りになることを祈るのみだな。

さて、俺はどうやってこのお金を使いきろうか。

早々と、手持ち金を使い切ってしまった妹を見ながら、兄はそう悩み始めた。

少女のお買い物（後書き）

とりあえず、サクラが一歩前進です。
体力馬鹿なクレアと違い、一般人まで身体能力が落ちてしまったサクラには、それなりの武器をあげたかったので。

誤字脱字感想ご意見などありましたら、感想のほうに書き込みお願いいたします。

少年のお買い物（前書き）

ちょっと、グダグダになってしまった感じが。
そのうち直すかもしれません。

少年のお買い物

「うーん、これか？いや、こっちの方が」

新年祭の露店のひとつ、恰幅の良い店主の前で、一人の少年が品物の前に座り込んで、うんうんうなっていた。

「お坊ちゃん」

「うん、どうした店主」

何なんだろう、この子供は私の商品に興味を持ってくれたのは嬉しいのだが、そこに座り込まれてしまっては、ほかのお客さんが寄り付いてこん、何とかならんか。

「小物類をさっきからごらんになっているようですが、どなたかにプレゼントでしょうか？」

「ああ、そうなんだ」

「お相手は、どのような方ですかな」

「うむ、友達なのだ、男達の方は、すぐ決まったんだが、女性のほうがなかなか決まらなくてな」

同世代のお友達の送るようですね、ふむ、見たところお金はちゃんと持っているようですし、適当なものでも売りつけてやりましょうか。

「ちなみに、男性の方達になにを差し上げるか伺っても？」

「うむ？ああ、父上に『ハイデール公爵のストーカー日記』を、カルマに『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』、クレスに『シルフィの上級薬草学』をあげようと思っている」

「・・・・・・・・・」

この、坊ちゃんのお父上とカルマと言う少年がどんな人かは、わかりませんが、何かうらみでも買ったんでしょうか。

「あら、クレア君じゃない、お買い物かなー」

二人の男性の心配をしていた私の耳に聞こえてきたのは、艶やかな声、目を向けるとそこには、白磁のような肌を朱に染めた、美しいエルフの女性が、さっきまで、品物を眺めていた少年の後ろから、抱きかかえるように少年に乗りかかっているのが見えた。

「やめてください、アイウスさん、酒臭いですよ」

へ、アイウス、いまこの少年はこの美しいエルフの女性のことをアイウスと読んだか？

「いいじゃない、堅いこと言わずにさー、おねーさんが一緒に選んであげるよー」

「む、それなら・・・・・・・・・」

と、坊ちゃんが悩んでいる間に、アイウスと呼ばれたエルフさんは楽しそうに品物を選び始めている。

「うーん、これかなー、ドロシーちゃんはやっぱりこれよねー」

「まだ、頼むとは、む、でもそれをドロシーにあげるのは賛成です」

「やっぱりー」

流されてるよ、流されてるよ坊ちゃん、そんな、商人の心の叫びに気づくはずも無く、アイウスと坊ちゃんは人数分、商品を選び終わったようだ。

「えーと、銀の髪飾り、ピンクのリボン、黒のカチューシャ、ユリシア草のブローチ、純銀のメリケンサック、シルバーネックレスですね、おまけして全部で銀貨５０枚になります」

「えーと、一個多いのですが」

四人分のはずだったのにと、不思議そうな顔をしている坊ちゃん、そして、商品を包もうとした私の手の中からするりとシルバーネックレスが引き抜かれる。

「授業料よ、クレアくん」

私の手から、抜き取ったシルバーネックレスを笑顔で、首にかけると、アイウスと呼ばれたエルフの女性は笑いながら立ち去っていった。

「・・・・・・・・・・」

「なにが、したいんでしょうねあの人は」

そういって、坊ちゃんは六個分の銀貨５０枚を払って、店から出て行く。

「アイウスって、確かエルフの・・・・・・・・・」

私の呟きは誰に聞かれることも無く、坊ちゃんが振り向くことも無かった。

ふむ、シルバーネックレスと純銀のメリケンサックが一番高いんだが。

やりきれないものがあるな。

少年の心の声

悪乗りしたアイウスに買わされた母上へのプレゼントと、勝手に入れられていたシルバーネックレスが

一番高かったことを店主から聞いた少年の、悲しい声であった。

少年のお買い物（後書き）

次で、お祭り編は終わると思います。
多分・・・・・・・・・・

誤字脱字感想ご意見がありましたら感想のほうに書き込んでいただけたら嬉です。

三歳、最後の日（前書き）

えと、四歳になります。

三歳、最後の日

「はい、アルマ、ユリシア草のブローチだよ」

「ひ、ひゃい、えと・・・ありがと・・・う・・・ございま・・・す、いや・・・、ありがとうございまひゅ」

なぜ、言いなおしたんだろう、結局噛んでるしね。

いやーアルマは可愛いなー。

「これは、フレス姉さんに」

そういって、顔を赤くして固まっている、フレスにピンク色のリボンを渡す。

「あ、ありがとうございますわ、クレア君」

返事も、そこそこにプイッと後ろを向いてしまった。

「こ、これは、プロポーズ？いえ、でも、相手はまだ三歳なんですのよ・・・」

何か、ぶつぶつ言っているが、後ろを向いてしまっているので聞こえない。

髪につけたところも見たかったんだけどなー。

「で、これはクレス兄さん」

とりあえず、フレスはおいていおいて、クレスに『シルフィの上級薬草学』を渡す。

「いいのかい？こんないいものいただいてしまって」

「うん、依頼の時にお世話になったし、あの時見せてくれた知識をもっと伸ばしてほしくてさ」

「きみは、時々本当に三歳かわからなくなるね」

そういって、俺から『シルフィの上級薬草学』を受け取ったクレスは、普段見せない嬉しそうな表情だった。

「それで、これはカルマ兄にっと」

「・・・・・・・・クレア、俺に何かうらみでもあるのか」

そういって、俺が差し出した『ハイデール公爵のストーカー日記』を前に硬直したカルマ、

「あ、ごめんカルマ兄、間違えた、こっちだこっち」

まあ、わざとだがな。

「これは、これで複雑な気分なんだが」

俺から、ちゃんとしたプレゼント『馬鹿でもわかるラブレターの書き方』をしぶしぶ受け取るカルマ。

まあ、いいこれでドロシーに成功するなら、何かふざけたことを言

っておいでなので。

「あ、そうだ、店主さんが言ってたんだけどね」

「うん、店主がどうかしたのか」

「その本、ラブレターの書き方が書いてあるだけで、成功するかどうかは、その人の努力しだいだってさ」

ぴしっと音が鳴りそうなくらい見事な硬直です、カルマさん。

ナイス、リアクション。

「はい、サクラ」

石になっているカルマを無視して、サクラの頭に黒のカチューシャを優しくつけてやる。

「ありがとうございます、お兄様」

そういって、サクラは嬉しそうに微笑んだ、のだが。

『お兄様？』

そんな、心の声が聞こえそうな視線が周りから、いたい、いたい。

その視線に気がついたのか、サクラははっと口元を押さえている。

一可愛いしぐさだけど、今更遅いぞ妹よ

―すみません、お兄様

さてと、後はドロシーと、父親と母上様だね。

「はい、ドロシーこれ」

「はい、ありがとうございますクレア様」

「つけてみてくれるかな、え・・・と、ドロシーの銀の髪に似合うかなって、思ったんだけれど」

「はい」

優しく、微笑むと、ドロシーは銀糸のようなその美しい髪に、銀の髪留めを絡めていく。

「はい、できました、似合っていますかクレア様」

その姿は、

「うん、とっても綺麗だよ、ドロシー」

綺麗過ぎて、俺はそんなありきたりな言葉しか言えない。

「はい、とっても綺麗な髪留めですね」

「え、いや、そういう「クレアくーん」」

訂正しようとする、俺にシルクの声が割ってはいる。

「シルク姉、いまドロシーと話して」

「そんあことよりさー、私にはなにをくれるのかな？」

へ？そういえば俺が買ったものって、本三冊、アクセサリー六つ、いま現在残っているのは『ハイデール公爵のストーカー日記』と純銀のメリケンサックのみ。

あはは、買うの忘れてた。

といえるわけも無く。

「シルク姉さんにはこれを」

と言って、『ハイデール公爵のストーカー日記』をその手に渡した俺だった。

子供達から離れ、一人酒をたしなんでいるエルフの女性、そこに、さっきまでからかっていた少年の母親が近づいてきた。

「アイエス」

「ん、どうしたのメアリィ」

その返事のように、メアリィは握っていた銀のアクセサリーをいとおしそうに軽く握った。

「うちの、可愛い息子からプレゼントを貰ったんだ」

「ほんとうにー、よかったじゃん」

笑い上戸なのか、アイエスはこらえられないといった笑みをその口元に貼り付けている。

「うん、貰ったんだ、アイエスから、って純銀のメリケンサックを・・・」

「ぶっ・・・、へ、ちょっと、クレア君?、裏切ったの?」

そのときになって、アイエスは自分の酔いがさめていくことに気がついた。

まるで、自分の周りを渦巻くように流れている、懐かしき闘気、昔共にあったその懐かしい闘気を感じてアイエスは頬を引きつらせる。

「メアリィ、メアリィ?落ち着いて?闘気が駄々漏れになっているわよ・・・」

「誰の・・・、誰のせいと思っているんだーーーーー!」

一人の、女性の断末魔の悲鳴が、夜空に響きわたる、その光景は、息子からプレゼントが貰えなかった父親がとぼとぼと近づくまで終わらなかった。

エルフの悲鳴が聞こえる中、当の少年が暗い笑みを浮かべていた。

ふ、ざまあみろ。

あんたのおかげで、泣き始めた父親がウザイ上に、シルクにあげたプレゼントのせいで、シルク以外から、流石にそれはひどくないかと冷たい視線を向けられたりと散々だったからな。

母上様に、嬲られるといいわ！

と、さてと、そんなことより。

目の前で、新たな年を告げる鐘の音が響き渡る、その音を聞きながら少年は、

―これで、やっと四歳だ。

そう、感慨深く思っていた。

三歳、最後の日（後書き）

お祭り編終わりました、どこがお祭りやねんと言ったつっこみはなしの方向で。

それと、ドロシーをほめようとしたところ、クレアは悪くありません、作者が語彙不足なだけです。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうにお願いいたします。

友との別れと、逃れられないお茶会（前書き）

えー、後一話かな、まとめて打っているわけではないので。
たぶんですが、後一話か二話で第2章が終わります。

友との別れと、逃れられないお茶会

新年祭から、１０日ほど経った日、フレグラス村の入り口、といっても門などは特に無く街道へ道がつながっているといった程度なのだが、そこには、村のほとんどの人間が詰め掛けていた。
この場に村のほとんどの人間がいるのは、学園にいく子供達と、もう一組カルマとシルクが冒険者の師匠と共に旅に出るのを見送るためである。

「シルク、いってらっしゃい、無理しちゃ駄目よ」

「うん、大丈夫だよおかあさん、お父さんが一緒だから」

母と同じ、太陽なような赤い髪を力強くなでられて、シルクは寂しそうに笑っている。
その横では、大きな長弓を背負った、がっしりとした体形の父親が、心配そうな母に笑いかけていた。

「お・・・おにいちゃん、いってらっしゃい・・・」

「おう、アルマもがんばれよ、特にどこぞ双子の世話とかな」

目じりに涙を溜めながら、それでも何とか泣くのをこらえているアルマと、それをみて自分よりも可愛い妹が、どこぞの双子の毒牙にかかったりしないか心配な兄だった。
ちなみに、カルマはまだ手のかかる妹がいるため、修行の師匠は、親ではなく、大剣を背中に背負った女性の冒険者である。
そうして、同じように学園組もお別れがすみ、といっても、ドロシ

ーのような例外以外は大概二年間旅に出ているので、学園組にとっては一時帰宅のようなものだが。

修行組みに、ひとつづつ武器が村の皆からプレゼントされる。その役目は、領主でもある父のクオーツだった。

「はい、シルクには宝珠の枝で作った短弓を、カルマ君にはミスリルの小刀だよ」

短弓、小刀といっても大人の人間にとってであり、まだ九歳になったばかりの二人にはちょうどいいサイズであった。

「宝珠の枝って！」

「ミスリルって！」

『そんなに、いい物をいただいていいのですか？』

ちなみに、ミスリルの製法はエルフしか知らないのだが、今回アイエスが村に来ていたから、インゴットを貰って製作した、宝珠の枝はご存知のとおり、どこぞの双子の収集品である。

「うん、二人の門出だからね、でも、だからこそこの武器に見合うような立派な冒険者になってくれ、それがぼくらみんなの気持ちだからね」

普段、どこぞの双子のせいで良く落ち込んでいる姿が目撃される領主様だったが。二人にとっても村のみんなにとってもこのときばかりは、自慢の領主といえる立派な激励の言葉に、少なからずほかの村人から拍手が起こる。

「あー、それとシルクちゃん」

「はい、クオーツ様」

「うちの息子から、君にだって、お祭りのシルクちゃんの分を買い忘れてしまったからって」

そういって、ミスリルの腕輪を渡す。

「あ、ありがとうございます、すごい綺麗な模様ですね」

「うん、ぼくも良くわからないんだけどね、多分古呪文字じゃないかな」

このときのクオーツの考えは当たっており、これは、サクラの腕輪をみてクレアがおもいついった品だった。
シルクが弓を使うことを想定して、その腕輪には『きたれ、万物を打ち抜く、普遍の矢よ』と、刻まれている。

「魔宝具らしいから、将来、魔法がうまく使えるようになった時に使ってくれといっていたよ」

「魔宝具!?、そんな高価なものいただいてしまっていいのですか?、それに私は、魔法は使えても古呪文字は読めませんよ」

「そこは、あれだ、魔宝具だから魔力を流せば具現化するとか何とか、ごめん、たまにぼくも息子がなにをいっているかわからなくなるんだ」

そこまで話して、クオーツはシルクの父が出発を促しているのに気がつく。

「まあ、細かいことは気にしないで、いまは綺麗な飾りだとおもっておけばいいと思うよ」

「はい、ありがとうございますって、クレア君にいっておいてください」

その言葉を聴きながら、村人達の元に戻っていくクオーツ。

「あれ、俺にはなにも無いの、あれは、間違えたとかじゃないの？」

と、呟いているカルマに、反応してくれるのは誰もいなかった。

そして、カルマも促されるように馬車に乗り込んでいく、

「まあいいか、ドロシーには会えなかったし」

その手に、白い便箋が握られていたのだが、それを知っているのは、三日三晩不眠不休で例の双子兄から受け取った本を読み漁り、何とかラブレターを書き上げたことを知っているのは、

「お、おにいちゃん・・・ふびん」

母の服のすそを握りながら見送っている妹だけであった。

村を見下ろすように建つ、お屋敷、春の暖かさが気持ちいい庭でそこに用意されたテーブルから、お菓子をつまみながら少年は村の方を見ながら黄昏ていた。

―そろそろ、出発したころかな

―ええ、そうですね、お兄様

―シルク喜んでくれたかな

「うん、きっとすごく喜んでくれたと思うよ」

心の中での会話に答えが、妹意外から帰ってきた。

「あれ、ぼく口に出してた？」

「ええ、駄々漏れでしたわ、兄さん」

そうして、三人顔を見合わせて笑う。

笑うことしかできなかった、目の前にはシルクに送ったミスリルの腕輪の失敗作と、それを前に黒いオーラを出している母親。その後ろには、陰に隠れるようにアイウスの金髪、そして横には失敗作を興味深そうに弄繰り回しているしているキャシー姉さんが座っている。

「二人とも、そろそろ覚悟は出来たかしら」

母親から放たれるどす黒い闘気に、流石に双子もたじたじなっていた。

「ははうえさま．．．あの、そのうしろのくろいものをおさめてくれませんか」

ああ、かなり片言になってしまった。

その息子の言葉にため息ひとつ付くと、母親は闘気を収める。

「なぜ、そこでため息なのでしょう、お母様」

「当たり前でしょ、子供が尋常じゃなかったら、ため息も出るわよ」

サクラの率直な疑問にキャシーが答える。

「普通の子はね、メアリィ姉さんの闘気をまともに浴びたら気絶するのよ、ドロシーみたいに」

そういって、銀髪の少女を指差すとドロシーはいつの間にか眠るように意識を失っていた。

「はあ、うすうす感じてはいたけど、ここまでとは思わなかったわ」

その言葉に、二人とも縮こまってしまう。

「で、そろそろいいでしょ、わかること、話せることだけでいいの、あなた達はなぜそこまで子供離れしているか話して頂戴」

それが、母親の真摯な頼みだと言うことに、気づかぬ二人のわけも無く。

「わかりました」

「兄さん」

「いいんだ、ぼくが話す」

兄が、静かに話し始めるのだった。
そして、大人二人はこの後、この二人からどんな言葉が出てきても良いよう、腹をくくる。

そう、大人二人、アイウスはメアリィの陰で、静かに気を失っていた。

友との別れと、逃れられないお茶会（後書き）

ちなみに、シルクのプレゼントを忘れていたのはネタではなく。
作者が本当に忘れてました。

シルクごめん！

ここまで書けば、わかると思いますが、話しの後半はいままで考えていた物とぜんぜんちがいます。
ああ、どうしよう、悩みどころですね。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうに書き込みお願いいたします。

双子の告白（前書き）

長かったので、四話に分けました。
一挙に、書いたら、一回消えたんです、（泣）
だから、四話です。

双子の告白

冒険者達の村を見下ろせる小高い丘、その丘に建てられた一軒の屋敷、
その春の花を咲きみだらせる庭には、テーブルとイスに座って向かい合う三人の大人と、三人の子供がいた。
ただし、その雰囲気はまどろむような春の陽気に反して、とても談笑と言えるようなものではなかった。
金髪のエルフと、銀髪の少女が、眠るように気を失っていることを考えても、とてもじゃないが、そこに親子が楽しく談笑しているといった雰囲気は感じられない。

「先に聞いてもいいでしょうか、母上さま、確かに、たびたびうかつな行動をしていた自覚はあります、でも、どこで気が付いたんですか」

度重なる、図書室への進入、隠れて行った系陣魔法＞エレメンタルスペル＜の練習、おかげで系陣魔法＞エレメンタルスペル＜を中級レベルまである程度こうしできるようになった、まあ、ギルドなどの依頼で行使したことは無いし、実戦でどこまでできるかわ、わかっていないし、属性を失ってしまった俺はこれ以上魔法を極めることができない、そんな袋小路まで俺はたどり着いてしまっていたのだが。

「そうね、去年の夏あたりかしら、私が二人が家出したと騒いだころから、二人の雰囲気が変わり始めたのに気が付いたわね」

なんと、俺達に意識が戻ったのは大体そのころ、もちろん【以心伝心】で妹と話し続けてはいたが、ある意味、身体はずっとまどろん

でいたといってもいい。
つまり、あのころこそが、身体に明確に意識が宿ったころだといっても良いのだ。

「そうでしたか、つまり最初からずっと気づいておられたのですね」

まあ、昨日まで、歩くのもしゃべるのも年相応だった子供が、いきなり書庫に忍び込んだり魔法の練習をしているのに気が付けば、嫌でも変に思うだろう。

「最初って言うのが、いつかなのかは私にはわからないけど、そうね、うすうす感じていて、キャシーに魔法であなた達について調べてもらって、確信したといったところかしら」

キャシー姉さんに、なにを調べてもらったというのだろう、俺達の特異性を明確にできるような魔法がいまの世界にも存在すると言うのだろうか。
確か、古呪魔法にそんな魔法があった気もするが、聖属性、しかも戦闘用に限定使っていた俺は補助用の魔法をほとんど知らない。
今回、シルクにプレゼントした魔宝具にしても、俺一人じゃ考えに詰まりサクラにかなり迷惑をかけた、これからは、属性に左右されない、そういった補助魔法も練習するべきかなと真剣に悩んでいる俺であった。

「確か、古呪魔法にそういったものがあったと記憶しています、兄さんは、戦闘限定の魔法だけを突き詰めていたので知らないかもしれませんが」

―ああ、そうだな、今度からはその方向も勉強して置くよ

サクラの補足に心の中で頷きながら、キャシー姉さんを見ると少なからず驚いた顔をしていた。

「古呪魔法を知っているなんて、あなた達はやっぱり」

「ええ、ご察しのとおり、私達は転生者です」

サクラの言葉に、母上さまとキャシー姉さんは、表情を暗くはしたが、そこまでは驚いていないようだった。

うすうす、感じてはいたのだろう。

俺達から感じる違和感、あるはずの無い知識。

考えてみれば、簡単にわかる話であった、ただ、その事実を認めるか認めないか、それができるかの話のだけで。

「そう、じゃああなた達のギフトも転生前の存在に関係があるのかしら」

ギフト？何のことだ。

―妹よ

―はい、お兄様

―ギフトってなんだ？

―私にも、わかりません、多分この『三千年』の間に生まれたものなのでは。

―そうか

なら、訊ねればいいだけのことだ、確かに『三千年』の間に生まれたものもあるだろう。
それを、まったく考えていなかった。
もしかしたら、俺達が知らないことはまだまだあるのかもしれない。
なんせ、いまの世界は、俺達が最後に過ごした世界から『三千年』後なのだから。

「すみません、キャシー姉さん、ギフトとは何なのでしょうか？」

双子の告白（後書き）

一話目～

キャシーの独白（前書き）

二話目ー
キャシーさん苦労人ですね。
説明回はこの人がいると便利です。

キャシーの独白

「すみません、キャシー姉さん、ギフトとは何なのでしょうか？」

目の前の、四歳になったばかりとは思えないほどその瞳に知識の色をたたえた少年、私の甥に当たるクレアのその言葉は、私には到底信じられないものだった。

仮にも、私の甥と姪は、自分達のことを『転生者』だといっていた。そして、この二人の語った話しの内容を聞いた限り、この二人は過去の人間の特徴などを引き継いだ子供として言われる転生者「先祖がえり」と呼ばれている者ではなく、その意識や知識をすべて引き継いだ魂として転生した「転生者」なのだろう。

実は、転生者と呼ばれている者は以外にも多く、ものすごく珍しいといったものではない。

ただ、それは「先祖がえり」を転生者のくくりに含んだ話ではあるのだが、それでも決して少なくは無い、私もいままで数人会ったことがあるということを考えれば、いるところにはいるということがわかるだろう。

ただ、ここまで滅茶くちゃな話は聞いたことが無い、少なくともギフトといったものが発見されたのは、５００年ほど前だと聞いている、『転生者』としての「転生者」と話をした時も、彼らはギフトの存在を知っていたのだ。

というか、あいつがそのギフトを見つけた人間だったらしいが。

つまり、ギフトの存在を知らないということはクレアとサクラの二人は２００年以上前から転生してきたと言うことだ、魔道具をに簡単に古呪文字を刻めるなら少なくとも、古呪魔法が衰退したと言われている３００年前より前なのだろうと思ってはいたが、５００前とはとても信じれるものでは無かった。

少なくとも、私はあいつの言葉を信じてはいない。

「そう、二人ともギフトの存在を知らないほど前からきたってことね、わかったわ

とりあえず、ギフトっていうのは神の祝福と呼ばれるものよ、神の加護っていってもいいわね」

ギフトとは、神々の祝福にして加護とも呼ぶべきものであり、上神クラスがついている子供は本当に稀である。
たとえ下級神の加護であってもその力はあなどれ無いものがあるし。
ましては、それが大天使クラスや女神クラス上神クラスだったら、物によっては災害と言ってもいいレベルの物になる。

「なるほど、つまりギフトを調べたことによって、ぼく達の『存在』がなんとなくわかったというわけですね」

「まあね、思いっきり【転生神の寵愛】を受けているのを発見すれば、流石に気がつくわよね」

それはもう、もろこれだッて感じだったからね。
クレアとサクラの様子をみると、何かに苛立ちを覚えているようだった。
流石に、某腐れ女神様に殺意を覚えているとはわからなかったが。

「でもね、それだけではわからないものもあるのよ」

そう、この子達についているギフトはそれだけではなかった。
そう、

クレアには、【魔王の同化】
サクラには、【勇者の浄化】
といった、不吉な予感しかしないギフトがついているのだ。
「クレア、あなたには【魔王の同化】、サクラには【勇者の浄化】
というギフトがそれぞれついているわ、
この意味、二人にはわかるかしら？」
そして、このあと、私は心底聞かなければ良かったと後悔する。
「ああ、なるほどやっぱりそんなことになっていましたか」
「そうですね、兄さん、流石にそこまで明確に提示されるとはおもっていなかったですが」
まるで、二人がもともとそういう『存在』だったような言葉、心底不吉な予感しかしないその言葉に私は耳をふさぎたくなる。
『ぼくは、もともと勇者で、私は、もともと魔王で、ですから』
ああ、こんなことならアイウスとドロシーみたいに気絶していれば良かった。

キャシーの独白（後書き）

二話目ー

やっぱり、母は最強です。（前書き）

三話目ー

やっぱり、母は最強です。

とっくの間に、私の頭のなかは真っ白になっていた。
優しいて知識が豊富な義理の妹が、変わりに話していてくれなければ私はとっくに卒倒していたのではないだろうか。

『ぼくは、もともと勇者で、私は、もともと魔王で、ですから』

そして、このによって、実質私には止めが刺されたといっても良い。

いや、良かった。

そのとき、二人の、可愛い我が子達の表情をみていなければ。

そう、その表情は、どこかあきらめているようなそんな表情。

金と黒の髪、互いの髪に仲良く色違いのメッシュをいれ、互いに色違いのオッドアイに憂いの色を浮かべて、鏡写しのようなその端正な顔に悲しみの表情を浮かべている可愛い我が子を。

私は強く抱きしめた。

もう、絶対に離さない。

だだ、そう思った。

その心に偽り無く、後は行動に移すのみ、昔から考えるのは苦手だが、それでも自分の感覚には自身がある。
いまこの二人は、悲しんでいる、諦めている。

転生者？魔王？勇者？

そんなものは私には関係が無い。

私にとって二人は、可愛い我が子以外の『存在』では無いのだから。

「おかあさま」

「ははうえさま」

その言葉だけはずっと変わらない、たとえどんなになろうとも、初めて言葉を覚えた時からずっとそう呼んでくれる二人。

「いいの、それ以上話さなくていい」

「でも、ぼく達の話を聞くためにここに来たのでは無かったのですか」

そう言う、クレアの表情はわからない。

もしかしたら、ひにくげに表情をゆがめているかもしれない。

もしかしたら、私を馬鹿にしているかもしれない。

でも、それでもいい、私は馬鹿でいい。

馬鹿でいいから、それ以上は聞きたくなかった。

わかっていたから、わかってしまったから。

この子達は、この話をした後、私達の元から消えるつもりだろう、

すべてを吐き出して、すべてを残した上でこの子達は私達の前から消えてしまうだろう。

根拠など無くても、わかってしまう。

誰よりも、優しくて、誰よりも心配性なこの子達は、私達に迷惑をかけないように消えるつもりだろう。

そんなこと、決してさせはしない。

「もういいのよ、だってあなた達、その話を、これ以上踏み込んだ話をしたら、私達の前から姿を消すでしょ」

二人をいったん解放すると、もちろんその華奢な肩はしっかり掴んではいたが、私は、二人の目をしっかりみてそう語りかける。

「そんなこと」

「無いと言える！絶対に私達の前から消えないといえるかしら」

反論などさせない、強い口調で二人をだまらせる。

「クレア、サクラ、あなた達がなにを背負っているかは、私にはわからない」

そういって、二人を片手づつ抱きしめると。

そう耳元に語りかける。

「でもね、私はあなた達の母親なの

あなた達がなにを背負っていようと、私はあなた達を愛しているの

よ」

たとえ、あなた達の過去になにがあろうと私は軽蔑も差別もしない。

すべてを受け入れるから、

だからお願い。

「私に、すべてを失わせないで、悲しませないで

わたしに、覚悟が無いだけかもしれない、でもね、愛する子供達を

失うほどの悲しみを味わった時、

私は、朝起きた時に笑う自信は無いわ、夜寝るときに後悔をしない

自信は無いわ

ただ、何も無い明日のために生きている自信はないわ」

いつの間にか、涙が流れていた。

もしかした、ずっと私は泣いていたのかもしれない。

その涙をぬぐう、そして、いつの間にか泣いていた二人にもう一度

視線を合わせると、はっきりと言い切った。

「これは、脅迫ととって貰ってもいいわよ、つまり、二人が勝手に

いなくなったらお母さん

死んでやるから」

その言葉に、私は、俺は

――負けた

と、思った、気がついたら、母親に抱きついて泣いていた。

取り戻すみたいに、そして、すべてを使い尽くすかのように、僕らはそのときだけ子供に戻っていた。

もしかしたら、安心したのかもしれない。

最後まで話していれば。

間違いなく、ぼくは、私は、この暖かい場所を、この夢のようないまの日常を、捨てていただろうから。

ごめんなさい、悲しませてごめんなさい。

泣かせてしまって、ごめんなさい。

そして、いつか、遠くない未来に、すべてを話すことができる時まで、もう少しの間だけ、ぼくらの、私達の

一一母親でいてください。

やっぱり、母は最強です。（後書き）

ふふふ、すべて暴露を期待した方、残念でした。
母の力は偉大なですよ。

こんなところで、すべてネタばれしてやるものですか。

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」ｂｙ女神様（腐）（前書き）

二章最後です。

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」ｂｙ女神様（腐）

ぼくが、帰ってくると。
ぼくの寝室では、愛する、妻と子供達が、抱き会うように眠りについていた。

その姿に、微笑を浮かべて、子供達の頭に軽くキスをする。
最後に妻の頬にキスをしてぼくは、静かに寝室を後にした。

だれも起こさないように、静かに扉を閉めて居間に向かう、そこにはぼくと同じ青い髪の妹が、そのひいき目にみても綺麗な顔を憂いに染めて座り込んでいた。
その隣では、ずっと気絶しているふりをしていたらしい、エルフの女性が同じような表情をして果実酒をのんでいた。

「で、どうだった？」

二人の給仕をしていたマリアに同じものをたのんでから、ぼくは二人前に座り、そう切り出した。

「なにが、にいさん」

相当、不機嫌そうだ、これはなかなか手ごわそうだな。

「もちろん、可愛い我が子のことさ、昼間話したんだろ」

領主としての仕事が無ければ、いや、今回の仕事が見送りで無ければ、絶対自分もいたかった。

流石に、今日はメアリィに、いかないと言ったら、叩きだされてしまったが。

「最悪よ、いろいろな意味でね、もちろん、私の気分的にもね」

我が妹にしては、珍しく本当に落ち込んでいる。

「アイウスは、どう思った」

埒があかなそうだったので、標的を我かんせずなエルフに向ける。

「そうねー、世の中には知ってしまったほうが不幸なこともあるのよね」

それ以上は、何も言ってくれなさそうだ。

どうしよう、すごい気になるんだけど。

「いまは、知らないほうがいいことでもあると思うよ、それこそ、メアリィみたいにすべてを捧げるほどあの二人を愛せるなら別だけれども」

「兄さんにはむりね、私の兄だもの」

ひどい言われようだ、この二人かなり鬱憤がたまっているようだな。

そこまで、破壊力があったのかあの二人の言葉は。

「はあ、しかもあれよりも奥があるっていうのがね」

「本当、信じられないわ、私なら発狂してそう」

ああ、二人だけわかる話題で盛り上がるのは、やめてくれ。
お父さん、泣きそうだ。

「義姉さんも、大概よね、私、自分の子供からあんなこと聞かされたら、愛しているなんてとてもじゃないけど言えないわ」

「流石。メアリィって話よね、私、ぞっとしたけど、少し泣いちゃったもの」

メアリィが、何をしたっていうんだ、そこんとこ詳しく話してもらえませんか二人とも。

「しかし、あんな重いお話を淡々と話すわよねあの二人も、我が姪甥ながら、末恐ろしいわ」

「でも、流石にメアリィには敵わなかったみたいね、鬼の目にも涙って言うのかしらねああいうの」

おい、アイウスぼくの子供は鬼じゃ無いぞ、そして、あの子達は君らに何を語ったんだ！

彼女達の愚痴と共に夜はふけて行く。

父親が、いくらがんばっても、わかったことは妻が最強だったという、わかりきった事実だけだったそうだ。

母の、腕の中でお兄様と一緒に眠る。
どこよりも暖かく、決して離してはいけないぬくもり。
額には、父親の優しさが残っているし、目の前には、ずっとあこがれ続けていた、『存在』が兄として寝ている。
そして、私達を包み込むように母が。

―こんなに、幸せでいいのだろうか

心の中で独白してみる、兄には届いているだろうが、深く眠っているのか返事は無かった。

もしかしたら、明日には終わってしまうかもしれない、そんな、幸せ。

幼い姿をした彼女は、誰よりも幸せの尊さを知っていた。

その、『存在』として与えられた役割のために決して味わうことの無かった、日常の尊さを。
それがどれだけ、壊れやすく、はかない存在であることを。

だからこそ、お母さん、お父さん。

あなた達が、許してくれる限り私達はそれを手放さない、どんなことがあっても守って見せる。

―それが、私の誓い

―なら俺は、お前を、サクラがその誓い捨てない限り、サクラを守ろう、それがサクラが誓いを守りことにつながるのなら

その瞬間、寝ていたはずの兄から、意識が流れ込んでくる。

【以心伝心】決して途切れることの無い、初めて得た絆、兄となった『彼』と私と対極の『存在』とつながった絆。

そして、初めて得た、初めて感じた家族の暖かさ。

そのすべてに包まれながら、私は眠りにつく。

明日は、何をしようかな？

お母様とドロシーもつれて、ピクニックに行こうか、兄と、いやクレアと修行に励もうか、それとも前から気になっていた論文を、お父様から借りてこようか。

そんなふうに、考えることができる、今日を、今をいとおしく思いながら。

私は、静かに目を閉じた。

―おやすみなさい、明日はもっといいことがありますように

「丸く収まれば、すべてはいいじゃないですか」ｂｙ女神様（腐）（後書き）

何とかうまくまとめることができたでしょうか？
やっぱり、かなり強引になった気もするのですが。
三話目をメアリィ視点にすると決めて、書き始めるとあれ以外の終わり方が思いつかなかったので。

それでは、次話からは三章になる予定です。

気まぐれな作者なので、間に外伝を挟むかもしれませんが、そのときは温かい目で見守ってください。

誤字脱字感想意見などありましたら感想のほうに書き込みをお願いします。

ふう、一日でこんなに書いたのは初めてだからな。

誤字が多そうだ。

それでは、また、できれば三章、やっちまえば外伝でお会いいたしましょう。

なあ、しばらく休憩してもいいかな？

雅なる月のごとく　一幕（前書き）

はい、本編をお待ちの皆さま

外伝が入りました。

しばし、お付き合いください。

雅なる月のごとく　一幕

「さて、クオーツ君」

「・・・・・・どうしました？先生」

「卒業試験の内容が決まったよ」

「・・・・・・今度は何ですか、ライオネルの巣に一ヶ月間こもればいいですか、それともフェンリルと三日三晩眠らずに戦ってこればいいですか、ああ、それとも水魔法の新しい術式を見つけてこいとか？」

「ごめん、・・・・・・ぼくもやりすぎたとは思っているよ」

「・・・・・・で、何ですか卒業試験は」

「うん、飛竜を倒してきて」

「は？」

「うん、飛竜を倒してきて」

「・・・・・・いや、聞こえてはいますよ、ただ自分の耳と、先生の頭の中身が信用できないだけで」

「信用してくれなくてもいいけど、ぼくは本気だよ、君ならそれくらいできるだろうし」

「そんな、信用ほしくないです」

「まあ、がんばって来てくれたまえ、『蒼の魔道士』君」

その言葉と共に、俺が6年間慣れ親しんだ教室であり、目の前でありえない課題を出してきた彼女の研究室の扉は閉じられた。

その扉の向こうにいるであろう見た目十歳、実際年齢十五歳の天才の名をほしいままにする師に、久々に殺意を覚えた昼下がりの午後だった。

学園都市ラグリオン、ラグリオン学園を中心に発展をした都市であり、主要産業が人材の育成といった典型的な学園都市である。

道端を歩くのは年若い少年少女ばかり、時たま壮年の者を見かけても、職業を聞けば7割方は教師と答えるだろう。

ラグリオン学園の校風をあげるとすれば、それは『自由』が一番しっくり来る。

学科も自由、職業選択も自由、そのまま学園の教師に就職するも良し、冒険者となって夢を追いかけるも良し、兵役につくも良し。

学科も、選択性であり、卒業するだけならば一学科、たとえば薬草科で六年間、土を弄繰り回して。学科の教師から出題される進級課題をクリアすれば卒業できる。

と、いった校風である。

学科によっては、先生が六年間冒険者をやってこい、と課題を出して、何しに学園に来たのかわからないといった話もあるくらいだ。

そして、俺が六年間受けた学科もこの例にまけないほどめちゃくちゃなものだった。

本来なら、一学科だけでなく、少なくとも三学科、多いい人なら六学科ほど受けて大体、卒業して行くのだが。

入学時に、『水魔法の応用魔法学』という学科を気まぐれに受けたのが運の尽きだった。

自分の系統魔法を学べるならと、彼女の研究室の扉を開けた瞬間、俺は、自分より一歳年下、見た目的には四五歳年下の少女の、放った実験中の新魔法にぶち当たった。

その魔法は、後に水系統の最上級魔法と呼ばれる「絶対零度（ダイヤモンド・ダスト）」だった。

彼女が、魔法を行使した理由としては、冷えたバナナが食べたかったっという理由だったそうだが。

それによって、俺は一ヶ月間彼女の研究室に冷凍保存されていたそうだ。

一ヵ月後に、学園長が何とか魔法を解除、水系の親和性が高かったおかげで、冷凍保存されても仮死状態ですんだのは良かったのだが。

学科の、仮入科期間は入学から一ヶ月間であり、俺が目を覚ましたときには、彼女の研究室に六年間入り浸るしか俺には選択は残されていなかった。

結果として、歳が近いこともあり、といいうか俺の方が年上だったこともあり、彼女が時たま吹っかけてくる無理難題を、死ぬ気で解決して言った俺には、いつしか色の属性称号『蒼』の名前が与えられるほどの魔法使いになっていたのはまた余談ある。

まあ、普通の学科であれば、進級試験に天狼族（フェンリル）とちょっと三日間ほど不眠不休で戦ってきてなんて無理難題は言わないだろうから。

その進級試験が有名になって、俺には今だ学科の後輩がいないしな。

そんな、ことをぶつぶつ呟いている俺が、今いるのは、俺が六年間下宿に使っている酒場のカウンター席だった。

時たま、小遣い稼ぎにおっちゃんの手伝いなどもしているが、ここは学園都市、稼ぎ方はいろいろある。

ひとつに、ここに通っている生徒が入学時に全員、何らかのギルドに登録しているということだ。

俺のような、魔法使いや剣士科に通っているやつなら冒険者ギルドに、同じ下宿で六年間同じ釜の飯を食ってきた俺の友達であるガイアなんかがそのいい例だ。

そして、ほかのギルドの例を挙げるなら、錬金士（アルケミスト）ギルドなんかがあったり、従士者ギルドなどがあったりする。

従士者って言うのは、簡単に言えばメイドとか執事のことだ。
実際には、かなり高度な教養と、戦闘力が必要な学科であり、人気はあるが従士学科を専攻して卒業できる者はかなり少ないといわれている。
とか何とか、初歩的なことを思い出して現実逃避している俺に、さっきから声がかかっている。
「おーい、クオーツやーい、卒業試験はどうだったー？」
「・・・・・・」
「おーい、おーい、・・・・・・おいこら氷の彫像、返事をしろ！」
「もう一度、いってみろガイア」
氷の彫像、それは入学時に俺についたあだ名であった、まあ、一ヶ月間いろいろな方法で俺を溶かそうとした先生が、俺を外に置き忘れて一週間くらい、リアル過ぎる氷の彫刻として軽く恐怖の対象となっていたらしいからな。
「なんだよ、機嫌悪いな、またちびっ子に無理難題を出されたのか？」
「・・・・・・お前は、どうなんだよ？」
「俺か？、俺はCランク以上の討伐依頼をクリアすることだってよ、ラクショーだぜ！」

「だよな、それが普通だよな」

ちなみに、天狼族（フェンリル）は幼体でもCランクであり、飛竜種は弱いものでもAランクといわれている。

泣いていいかな？

「あいつは、俺を卒業させる気が無いんじゃないかと最近思うよ」

「は？」

思わずでた、俺の本音に返ってきた返事は心底呆れたような間抜けな声だった。

「おまえ、なに今更なこと言ってんの？」

「何のことだ？」

「知らなかったのか、毎年毎年、お前に無理難題を吹っかけるから、流石に学園長が、アイナ先生を注意したら」

ちなみにアイナとは、お分かりのとおり俺の担当教師の名前だ。

『あの子を卒業させるつもりは、ありませんから！』

「と、おっしゃったそうだ」

って、

「は？」

「その顔をみると本当に知らなかったみたいだな、魔法研究塔あたりじゃかなり有名な話しだぞ」

魔法研究塔、その名のとおり新魔法の開発などを行っている学園の研究室郡であり、俺の教室でもあるアイナ先生の研究室もそこに居を構えている。

そして、いま、数少ない友の証言により、文字通り俺は頭を抱えることになった。

卒業させる気無いって、真剣かあの女！

まあ、そこまで聞けば今回の卒業試験の意味もわかるというものだ。

俺を絶対に逃がさないつもりか。

「愛されてるねー『蒼の魔道士』くん」

「うるせー、勘弁してくれ・・・・・・」

「で、そこまで愛されているクオーツ君の卒業試験、お題は？ババンといってみよう！」

テンション高いなー、こいつ、俺もこう生きれたら楽なのにな。

「飛竜種の討伐」

「へ、マジ？」

「ああ、本当に卒業させる気が無いらしい」

「愛されてるね・・・・・・クオーツ」

「やめてくれ、頼むから」

そして、酒場の喧騒とは裏腹に静まり返る俺達。

「なあ、クオーツ」

「なんだ？」

「こうゆうのもさ、・・・・・・ヤンデレって、ゆうのかな？」

俺には、その質問に沈黙するしか回答が思い浮かばなかった。

雅なる月のごとく　一幕（後書き）

と、いうわけで父親の過去編です。

もちろん母上様も出で参ります。

次話で、出てくる予定ですのでー。

またお会いしましょう。

誤字脱字感想意見などありましたら、書き込みお願いします。

雅なる月のごとく　二幕（前書き）

母上登場です。

雅なる月のごとく　二幕

「クオーツは飛竜種の討伐か、アイナ先生は相変わらずだね」

「あはは、キールもそう思うか、可愛い顔してやることがえげつないよなー」

反論できない、できるわけが無い。俺は酒場のカウンターに身体を投げ出しながら、新しく会話に加わった錬金科であるキールの顔をにらみつけた。

目元をほとんど隠している綺麗な銀髪のなかから見せる静かな瞳、ほとんど表情がわからないその顔をわずかに笑みの形にゆがめたキールと目が会う。

「なに、笑ってるんだよキール」

「笑う？、そうかぼくは笑っているか」

おまえ、気がついてなかったのかよ、

確かに、キールはほとんど笑わない、俺達といるときは結構わらうのだが、それでも、ほかの人間と話しているときと比べて、と言ったレベルの話である。

一説では、誰がキールを笑わせることができるかといった賭けをした連中がいるほどらしい。

なぜ、俺が知っているかといえば、ありがとうお前のおかげだ、と

言って俺に金一封くれた馬鹿がいるからだ。
なんか、かけに大勝ちして相当儲かったらしい。
「おまえ、めったに笑わないくせに、こんなことで大笑いしてんじゃねーよ」
「すまんな」
といって、後ろを向いたキール、その肩が震えているのを俺は見逃さなかった。
「まあ、いいじゃん、キール・クオーツ、依頼掲示板みにギルドにいこうぜー」
「あ、ああ、そうだな」
「そういえば、キールは試験何なんだ」
錬金士のキールは、もちろん錬金科の生徒である。
錬金科の試験はもちろん生産系のほうが多い、のだが
「卒業試験は、誰かの討伐依頼に同行して、その素材で何かを作ることだ」
「ふうん」
楽そうなことで、うらやましいかぎりだ。
「だから、ぼくは、クオーツの依頼について行く」

「へ？」

楽しそうだからな、そう俺に言い残してキールは隣の席から立ち上がった。

「キールがいくなら、俺も行こうかなー」

「ガイア、おまえはCランク以上の討伐だろうが！」

「だからCランク以上でしょ、飛竜種は」

「あー、・・・ふん、勝手にしろ」

かってにするよー、ってガイアも俺をおいてキールと一緒に歩き始める。

「ふん、馬鹿共め・・・」

おれも、立ち上がって、歩き出す。

どうしようも無いほどに、にやけようとする頬をこわばらせながら。

飛竜は、と依頼掲示板を凝視する俺、

ぱっと見、見つけることができた飛竜種の討伐依頼は三つ、

レッドワイナスと呼ばれる飛竜の討伐がひとつ、レッドワイナスは

飛竜種のなかでも、翼竜目（ワイバーン）と呼ばれている飛竜であり、前足の変わりに翼がついているのが特徴のワイバーンのなかでもレッドワイナスは5メートルほどしかない小型の飛竜で、ランクはAだ。
小型ならランクはC位なのではないか、と勘違いする冒険者もいるのだが、そこはレッドワイナスもやはり飛竜種、通常の飛竜の膂力を失った変わりに、この竜はかなりの魔力と狡猾さを持つ、正直言って魔法士である俺の一番苦手とするタイプだ。

雷電と呼ばれる飛竜の討伐が二つ目、雷電は雷属性を常時放ち続ける飛竜種で、極東の島国に良く見られる蛇竜目と呼ばれる種で、特徴的なのは鼻に二本の髭を持ち翼を持たないと言うところだろうか、世界中の竜種の研究者がその飛行方法を研究し続けているが、いまだ解明にはいたっていないそうだ。
飛竜種としては、知能が高く手を出さなければ温厚なのがこの、蛇竜目の特徴とも言える、中には例外もあるが雷電はこの例外に当てはまらず、基本は温厚だ。
しかし、蛇竜目は神性がかなり強いため気候が意図せずに操れてしまうのがこの種が、討伐対象になるおもな理由である。
簡単に言えば、雷電の場合は常に雷雲をその身に纏っているため、この竜が上空を通り過ぎると万雷が落ちるというのが雷電の常時落雷と呼ばれる特性である。

最後の三つ目は、レッドドラゴンである。
まあ、こいつについてはそう語ることも無い、飛竜種でもオーソドックスな火竜目（サラマンダー）と呼ばれる種の中で代表と呼ばれているほど、の飛竜だ。

飛竜種は絶対的に数が少ないのに、レッドドラゴンはオーソドックスといわれるほど目撃情報が多い、その凶暴性にあいまって討伐依

頼も多いのになぜ、そこまで目撃情報が多いのか、つまり、レッドドラゴンの強みはその強大な生命力にある、Ｓランクの冒険者クランでも撃退はできても、討伐になるとかなりてこずるといわれるのがレッドドラゴンである。

ちなみにレッドワイナスがＡランク、雷電がＳランク、レッドドラゴンがＡランクである、が、レッドドラゴンは撃退が比較的容易にできるのでＡランクと言われている、のであって、今回は討伐先ほど言ったように討伐のランクはＳランクとなっている。

「まあ、妥当にレッドワイナスかな」

「だろうね」

「おれは、何でも良しーだぜ」

まあ、魔法防御力が高いレッドワイナスはかなり相性が悪いのだが、ほかの依頼を見ると相性が悪いとか言ってられないほど狂悪なラインナップだったので当然却下、消去法でレッドワイナスだな。

と、考えていると、俺が手にするよりも速くレッドワイナスの依頼書に手が伸ばされた。

『あ』

「あら、失礼しました、依頼が見えなくなってしまいましたか？」

そういって、目の前でレッドワイナスの依頼書を手にとった少女が、こちらを向いて頭を下げてきた。

「あー、これはどうもご丁寧に」

思わず、俺も頭を下げてしまった。

「じゃ無くて、君、その依頼受けるの」

危ない、危ない、思わず流されてしまうところだった。

と、思って彼女を見ると、彼女はなぜかご立腹のようだ、

依頼書を持った手を腰にくみ、成長中の胸を一生懸命張って、軽く頭を振って金の軽くウエーブした髪を後ろに流すと。

「君じゃありません、私の名前は、メアリィ・ツヴァインツェルですわ、『蒼の魔道士』殿」

彼女は掲示板の目で立ち尽くす俺達三人に、そう名乗りを上げると得意げな顔をする。

「えーと」

「うん」

「そうだねー」

『だれ？』

三人同時にハモった俺達が、名前に苗字を持っているのが貴族の証

だと気がついたのは。
顔を紅染させたメアリィ嬢に俺の顔面がぶん殴られた後のことだった。
あれ？パーじゃなくてグーだったんだけど。

雅なる月のごとく　二幕（後書き）

殴られましたね。

まあ、貴族についてはいずれー

誤字脱字感想意見などありましたら、乾燥か活動報告の方に書き込みお願いいたします。

雅なる月のごとく　三幕（前書き）

実は、殴られたクオーツ君

気絶しています。

今回は前半、第三者視点です

雅なる月のごとく　三幕

数多くの、学生達がその場所を利用し、小遣い、または試験と、長年利用されてきたラグリオンの冒険者ギルド。

そこでは、いま、掲示板前にある酒場のようになっているスペースに、三人の少年と一人の少女が座り込んでいた。

少年達は、魔法士の証である黒のローブを着た蒼髪のうつろな目をした少年、魔法士の黒いローブに良く似た服、相違点は錬金士の特徴色である金色の糸で胸元に秤の刺繍が入っているローブ、を着た銀髪で目元を隠している少年、栗色の髪を短髪にして、剣士科の特徴でもある茶褐色の革鎧を急所だけ守るようにつけた快活そうな瞳をした少年。

もちろん、クオーツとキール・ガイアのことなのだが、今三人は、金の軽くウエーブした髪の利発そうな少女の前で縮こまっていた。

といっても、周りから見てそう見えるだけの話しであり、実際のところは落ち着き無く視線をふらふらさせているガイア、銀髪に隠した目元はどこか虚空を見つめているキール、虚ろな瞳でテーブルを直で凝視している、または突っ伏しているクオーツ。

まあ、簡単に言えばクオーツは、その右頬を真っ赤に腫らしている原因の元となった、少女の右フックによって意識を刈り取られていた。

そして、そんな三者三様の様子を呈している少年達の前で、その状況を作り出した少女がその瞳を怒りに染めて静かに座っているとい

ったわけだ。

「それで、あなた達は、なぜレッドワイナスの討伐なんてやろうと思ったんですの

Aランクの飛竜種といっても、レッドワイナスはやはり飛竜種です、学生の小遣い稼ぎならやめておきなさい」

ずっと続いていた沈黙に、嫌気が差したのか少女が話し始める。

「とー、いってもなー、キール」

「今の時期に、酔狂で飛竜種の討伐依頼を受けるものはいない」

おろおろと、無表情な親友に話を振る栗毛の少年と、淡々と話す銀髪の錬金士の少年。

「つまり、卒業試験というわけですね

ですが、剣士科はCランク以上の討伐依頼、錬金科は同行採取で作った錬金物の提出、魔法科は応用魔法開発だったと記憶しておりますが」

その言葉に、二人は固まった、目の前の高飛車そうな少女がほかの科の試験内容を把握していることにかなり驚いたのだ。

「なぜ、それを知っている?」

そんな、キールの質問はあっさり答えが出される。

「友達から聞いただけですわ
それとも、あったばかりの殿方をグーで殴って気絶させてしまうような女には、友の一人もいないと考えていたのですか？」
その言葉に、あっさりと納得して、二人は首を横に振る。
良く考えれば、相手は貴族、友達かどうかはおいといても取り巻きの一人や二人はいるだろう。
と納得して。
「ああ、そうか、ならクオーツの試験内容を知るわけが無いな」
「そうだねー、アイナ先生のせいで科生がほかに一人もいないからな」
その言葉に、少女は怪訝な表情をする。
「何のことです？格好から『蒼の魔道士』は魔法科の生徒だと思っていましたが」
あー、殿が無くなっているな。と心の中で考えていた二人。
「あー、まあ普通はそうだよな」
「ああ、こいつは少々特殊だからな」
そして、少女は聞くことにになる、六年間この不幸な少年の隣にいた二人の親友から、彼におきた喜劇の数々を。

「そ、それでは、一年の終了式の時に教頭先生のカツラを吹き飛ばしたのは彼だったですか！」

「そう、あれが面白がったアイナ先生の最初の進級試験だったんだよー」

「へー、じゃあ、魔物の森を管理しているフェンリルは」

「ああ、そうだ、魔素を取り込みすぎて凶暴化したフェンリルを落ち着かせるため、三日三晩不眠不休で戦い続けたらしい」

「え、摩訶不思議といわれていたライオネルの生態系を」

「ああ、あれはー」

などなどと、気絶している少年を残して話しは進んでいくのだった。

頬の痛みに引きずられるように、ゆっくりと意識が覚醒していく。

「あら、おきたみたいですわね」

「おはよー、クオーツ」

「起きたか、頬は大丈夫か？」

目の前には、俺を気絶させたであろう少女と和やかに談笑する二人の親友の姿があった。

「俺は、どれくらい気絶していたんだ？」

「ん、そうだな五時間くらいか」

「あら、もうそんな時間ですの？

楽しい、お話をしていると、やっぱり時間が経つのが早いですわね」

楽しいお話し？こいつら、俺が気絶している横で仲良くなってやがったのか、と軽く落ち込む。

まあ、いいか、と気分を切り替えて。

「で、何の話をしていたんだ？」

とりあえず、どんな話をすればこんな気難しそうな女性とこんな、いい雰囲気になれるかが知りたかった。

「クオーツのはなしー」

「アイナ先生の無茶振りだな」

「あなたの、半生記ですわね」

三者三様の答えが返ってきた。

全部、俺関連かよ、流石に俺は自分の黒歴史を話しのネタにする勇気は無いぞ。

と、いうか、人の話で五時間も盛り上がっていたのかよ。

「それで、クオーツ君、私から提案なのですが」

「ああ、目覚めた俺にいきなり提案とは、ずいぶん俺は可哀想な存在にされたようだな」

「ええ、それはもう」

されたかよ、本当に何の話したんだよこいつら。

「ふふ、失礼

それで、クオーツ君、提案というのはですね、一緒にレッドワイナスを討伐に行かないかってことです」

一緒にか、まだ、俺だけは会って間もない状態だからこの少女が、なぜ、そこまで言ってくれるかわから無い。

「すまん、気絶していた俺にとっては、君と会ったのはついさっきのことだ

失礼な質問かも知れないが、そこまで君が譲歩してくれる理由がわからないのだが」

「だから、私の名前はメアリィだと言っているでしょ」

俺の真剣な質問だったのに、なぜか返ってきたのは呼びかたの訂正である。

「おや、今はその君の「メアリィですわ」」

「いやだか「メアリィですわ」」

何だろう、最近は名前で科白をつぶす遊びでもはやっているのだろうか。

泣いてもいいかな？

「わかった、メア「メアリィですわ」」

頼む、勘弁してくれ！

「ふふ、失礼ついあなたの反応が面白かったので

これなら、アイナ先生の気持ちも少しわかるような気もしますわ」

と花の様に笑うメアリィ嬢と、含み笑いを浮かべている左右の男共二人。

帰っていいかな？何かもう布団に包まって羞恥に身を震わせていたい。

「それで、どうですのクオーツ君、この依頼、共同に受けませんか？」

「その前に、ひとつ聞いてもいいか？」

「はい、何でしょうか？」

おれが、ずっと考えていた疑問それは――

「なぜ、君はこの依頼を受けるんだ？」

雅なる月のごとく　三幕（後書き）

次回、メアリィ軍団（笑）全員集合

依頼開始です。

依頼編二話の、その後の話を一話書いて多分　外伝　雅なる月のごとく　は終わりとなる予定です。

最後までお付き合いください。

外伝な外伝　アイナ先生の魔法試験（前書き）

続きと思った方申し訳ありません。

外伝の外伝です。

もともと、ここには名前を決める云々がかかれていました。

外伝な外伝　アイナ先生の魔法試験

これは、まだ彼が一年生だったころのお話。

「クオーツ君、一年期の進級試験は新しい水魔法の開発だよ」

「は？」

「開発だおー」

「はあ？」

「がんばれ！」

びしっと親指を立てる、見た目合法ロリなような実際はただのロリなアイナ先生。

「ふふん、需要だよ」

「誰に言ってるんですか、もしくは頭が逝ってるんですか？」

「おやおや、君も言うようになったものだねー」

「ありがとうございます、先生のおかげですよ、ところでその右手に溜めている魔力は何ですか？」

「これかい？『瀑布招来』＞タイダルウエーブ＜だよ」

「ぎゃぶあーーーーーーーーーー」

彼の悲鳴を心地よく感じながら、彼女は綺麗さっぱり見ずに流した彼のいなくなった部屋の扉を閉じた。

「ふふ、彼は何を見せてくれるやら、楽しみだね」

といいつつ、あれから数日たってしまった。

今は、進級について一学年の生徒に教頭先生が熱く語っているところだ。

正直、うんざりだ、部屋に戻って研究を続けたい。

つい、暇なので一学年の生徒達の中から彼を捜して見ることにする。

前の方から、

ジーーーーーーーーーーーッ

いない、金髪の少女が視線を感じたのかこちらを振り向いたが、彼はいない。

真ん中当たり、

ジーーーーーーーーーーーーッ

いない、栗毛の少年がのんきに鼻歌を歌っているが、彼はいない。

後ろの方かな？

ジーーーーーーーーーーッ

いない、赤毛の少女がきょろきょろしているが、彼は見当たらない。

ええい、どこだ

と思った矢先、バタンと一番後ろにあった扉が開き見慣れた彼が飛び込んできた。

「完成したぞ！先生」

って、今は教頭が話しているんだがね、どうでもいいガ。

「本当かい！？」

まして、僕も叫んでいるしね。

「ああ、見てくれこれが俺が作り上げた新魔法・・・」

彼が、中級スペルの『水冷弾』＞ウオータボール＜を空中に一個、射出する。

その大きさは、普通のものよりも大きいがそれだけなら不合格だ。

「大きいだけかい？」

「なわけ無いだろ、みてろ＞フリーフォー「君達！！！！！！」＜」

彼が、何かやろうとしたときに、教頭のキンキン声が私達の空気をぶち壊した。

そして、私達は同時に教頭を凝視してしまった、そう、彼も凝視してしまったのだ。

魔法が、どこに向けて飛ばすか照準を決めぬままに。

「だいたい、君はなんだね！いきなり入ってきて！」

「あ、教頭」

「何ですか！アイナ先生！」

「今ので、彼の魔法の照準が教頭になってしまいましたよ」

「はっ？なにお．．．．．．」

ザッパーーーーーーーーン

『狙い撃つ滝』＞フリーフォール＜が校長の頭の上から流れ落ちた。

つまり、彼が作り上げた魔法は、『水冷弾』から『狙い撃つ滝』につなげる二段式の照準魔法だ。

ふむ、威力もまだまだだし、改良の余地はいくらでもありそうだがとりあえずは。

「ふむ、クオーツ君合格だよ！」

立ちすくむ生徒達の中、胸に魔法柄の紋章が無いローブをきた少年に僕はハンズアップを繰り出した。

水浸しになった教頭のカツラがどこまで流れていったかは、僕の知ったことじゃない。

外伝な外伝　アイナ先生の魔法試験（後書き）

それでは、次回はしっかりと雅四幕をお書きいたしますので。

そこでお会いいたしましょう。

雅なる月のごとく　四幕（前書き）

全員集合、出発です。

俺が発した疑問。

「その疑問はもっともですわね、私の学科は剣士科、卒業試験はＣランク以上の討伐ですから」

にたいして、でも、あなたのような例外もある、と彼女は続ける。
そう、俺のような例外。
本来なら、人数の多い学科の方が試験は難しくなる、試験と言う名前のふるいに学生達をかけないといけないのだから。
だからこそ、この学園に通う生徒は、人気の無い学科、人の少ない学科、もう、先生の趣味に近い学科を何個か受けたりするのだ。
一人しかいないなら、その生徒をふるいにかける必要も無く、その分野を極めることができるなら、同じ職業でも違う特色を発揮できるかもしれない。

それこそが学部選択における自由の意味である。

つまり、学部選択において、一ヶ月間氷付けで、人気の無い学科しか受けられ無かったうえ、その学科の先生の嫌がらせで、卒業試験が危うい生徒なんて俺くらいのものなのだ。

本来ならね。

「私が受けている、もひとつの学科は、付加魔法科です

そして、卒業試験は、Ａランク以上の討伐依頼でした」

付加魔法科、剣士として受けたい学科ではあるのだが、先生が偏屈なうえ、過去十年間で卒業生が二人しかいないという厳しい学科だった。

「そうか、あの先生ならやりかねないな」

「ああ」

「そうだねー」

俺の相槌に、先まで黙って話を聞いているだけだった二人も会話に加わる。

「でもー、付加魔法科の一番敬遠されるところは

六年かけても戦闘で使えるレベルまで習得できないこと、ってきいたけど」

同じ剣士科のガイアの疑問は的を得ているのだろう。

彼女は少し顔を曇らす。

「ええ、おかげで私はこの五年間、付加魔法の進級試験は一切ありませんでした

でも、できるようになったからこそ、この卒業試験なんです」

そして、彼女の笑顔が花開く。

そして、そのときには俺の中でもう結論は出ていた。

「メアリィ嬢、あなたの提案どおり、この依頼ぼくらで受けよう」
俺の言葉に、また少し彼女を笑みを強くした。
「それでは、そちら三人追加で、合計七人ですね」
へ、七人？
「えーと、後の三人は何？」
「クオーツ君、私にも、あなた達のように、危険を顧みないでついてきてくれる親友がいるということですわ」
俺の疑問に、彼女はそう答えた。
ところで、いつの間に俺、名前で呼ばれるようになったんだ？
しかし、その疑問ははれることないまま、依頼の日を向かえることとなる。

学園都市ラグリオンの城門前、そこでは、今七人の少年少女達が顔をつき合わしていた。
「まずは、皆さんご存知でしょうけど、メアリィ・ツヴァインツェルです、メアリィでいいですよ」

まず、メアリィが先頭を切って自己紹介、
薄手ではあるが、白いアーマープレートを邪魔にならない程度、身に纏い、背中には両刃の大型剣＞ロングバウンド＜を背負っている、良く見ると所々に魔法陣が刻まれているので、この剣は彼女の付加魔法に必要な物なのだろう。
そして、いつもどおり輝くような軽くウエーブした金髪を、今日は後ろで纏めている、のが今日の彼女のいでたちであった。

「皆さんよろしくお願いします、私の名前はマリアです」

そういって、綺麗なお辞儀をしたのは、従士科の制服に身を包んだ銀髪の少女であった。
ちなみに、従士科の制服は女生徒の場合メイド服なのだが、結構従士科は人気があるため見慣れた制服だったりする。

「こんにちは、ライナスです・・・」

そういって、マリアのまねをしたのかぎこちないお辞儀をしたのは。
蒼い髪を腰どころか膝ウラ辺りまで伸ばした小さい少女、その身の丈より大きい蒼水晶の錫杖をもっているところを見ると、クラスは治癒科＞ヒーラー＜らしい。
まあ、治癒科の白を基調としたローブに胸元に、青い糸で癒しの象徴でもあるシルフェの花が刺繍されている時点で一目瞭然なのだが。

「みんな、よろしくー、ロードです」

嬢性陣の最後は、赤い髪に健康的に日焼けした肌の少女だった。
動きを阻害しないためにか、ほとんど鎧などはつけておらず、軽装のうえから、旅人が着るような厚手のマントを羽織っている。
その背中に、身に余るような長弓＞ロングボウ＜を背負っている、

その旅装のような格好とその背中の長弓を見れば、彼女が狩人科なのがわかるだろう。

「どもー、ガイアでーす、よろしくですー」

ロードの軽い感じに触発されたのか、続いてガイアが軽い感じで女性陣に挨拶した。
いつもどおりの栗色の短髪に、最低限の革鎧、腰にはロングソードと小型の丸盾をつけている。
ちなみに、ガイアと、メアリィの鎧の胸には剣士科の証である剣と盾が交差したマークが刺繍されている。

「キールだ、よろしく」

そして、いつもどおり無表情なもう一人の親友。
銀の髪で目元を隠して、胸元に金糸で秤のマークを刺繍されている以外は魔道士と同じ黒のローブに、大きな黒いマントを羽織っている。
この黒マント、内側にはたくさんポケットがついているらしく、戦闘に行くときの錬金士の必須アイテムなんだそうだ。

「よろしく、『蒼の魔道士』ことクオーツだ」

最後を閉めたのはなぜか俺、いつもどおり名乗るときには『蒼の魔道士』とつける。
格好は、何も刺繍されていない黒いローブでは無く、今日は黒いシャツと黒いズボンのうえから旅用のマント羽織っている。
腰には儀礼用の短剣を二本差し、キールのマントと同じようなつくりになっているマントの内ポケットには薬ビンのようなものが数個くくりつけられている。

「ふむ、それでは自己紹介もすんだようだし、話ならこれからの道中いくらでもできる

まずは、先に進むとしようか」

そして、メアリィの号令で皆歩き出した。

目指すのは歩いて三日ほどの位置、レッドワイナスが根城にしているらしい場所、レグナル山脈である。

城門に向かって歩き出す俺達。

「あしがー、つかれた」

とガイア。

「まだ、城門を出てすらいないよ！」

と驚くロード。

「マリア、お茶にしましょうか？」

と優雅なメアリィ嬢。

「歩きながらですか！」

これは、マリアではなく、俺だ。マリア嬢は歩きながらも淡々とお茶の準備をしている。
女性陣はなれたものなのか、マリアからティーカップを受け取るとおいしそうにのみ始めた。

「ところで、『蒼の魔道士』ってクオーツ君がもしかして、あの笑撃の『教頭の空飛ぶカツラ事件』を演出した本人なのですか」

これが、マリアだ。

「ああ、それはもう忘れさせてくれ」

これに関しては、本当に頼む、忘れさせてくれ。

「おなか、・・・・すいた」

これはライナス嬢だな。

「・・・・・・・・・・・そうか、気が会うな」

と、返すキール。

お前ら自由すぎだろ！

こうして、城門を守る騎士科の、苦笑している生徒の前を通り過ぎながら、俺達の卒業試験は始まった。

雅なる月のごとく　四幕（後書き）

次回はレッドワイナス戦になる予定です。

一話で終わるかなー？

誤字脱字感想意見などありましたら書き込みのほうお願いいたします。

なかがきの募集はまだ続いておりますので。

活動報告のほうにでも書き込んでください。

雅なる月のごとく　五幕（前書き）

レッドワイナス戦です。

まあ、あくまで外伝なので、戦闘は軽めです。

どっちにしろ戦闘描写は苦手ですけど。

雅なる月のごとく　五幕

学園都市ラグリオンから、北に歩いて三日、活火山の集合山であるレグナル山脈が存在する。

その一角、山の中腹を現在、七名の少年少女がゆっくりと油断無く進んでいた。

油断無く、中堅の冒険者でも実践できないその領域をこなしながら、彼らは、その視線の先、レッドワイナスの巣に静かに近づいていく。

そこでは、今現在一頭の赤小竜が寝息をたてている。

「俺が、呪文詠唱を行う、できれば一撃で、それで無くてもダメージは与えたい」

その身を、旅人が纏うようなマントで固めた彼らの一人、蒼髪の少年がそう言葉を発してから、詠唱体制に入った。

「わかった、私もその後の連撃に備えて、付加魔法の詠唱に入ろうと思うんだが、かまわないか？」

蒼髪の少年の言葉に、うなずくと軽くウエーブした金髪を後ろでくくった少女が、続いてそう発言した。

「ああ、大丈夫だ、ガイアとロードはレッドワイナスの監視、キールは結界防御の準備、ライナスは補助頼めるか？」

「ああ」

と、キールと呼ばれた銀髪の少年。

「おーけー」

と、ガイアと呼ばれた栗色の髪を持つ少年

「かまわない」

と、深紅の髪をなびかせる少女。

「・・・・・・」

こくり、とうなずく長い蒼髪の少女。

「私は、いかがいたしましょうか、メアリィ様」

と、銀髪のメイド服の少女。

「マリアは、私達の詠唱の護衛を頼む、かまわないなクオーツ」

メアリィと呼ばれた金髪の少女が、そう蒼髪の少年に問いかけた。

「ああ、それじゃあみんな、始めよう」

『おう』

了承の言葉と共に放たれた、開戦の火蓋、その言葉と共に彼らは静かに持ち場についた。

大気の中にあふれる水分、その一つ一つを己とひとつに、自分の意思と共に魔力に練りこんでいく。

―汝は天地と共に

その魔力を、今度は練りこんだ意思のままに形づくる。

―我は汝と共にあろう

その意思を、具現し、実体化させ、とき放つ。

―汝は天地にして我、汝は我にして、すべての始まり成り

それが何かと聞かれれば、『海』だろう、しかし、誰も濡れはしない、それはすべて天に浮いているのだから。

―汝は我、我は汝、ゆえに我の呼びかけに答えよ

そして、その『海』は、俺の意思のまま、形をとる、一匹の竜を狩るために。

―汝の名は、『原初の海』、すべてを包み込む始まりの海成り

そして、すべてが組みあがった。

始まりの、すべてを内包する海が一陣の風になって、宙を翔る。

―展開『原初の海』、始動『エアグライド』

詠唱の終わりを告げる言葉と共に、『原初の海』を内抱した水の槍が、赤小竜に突き刺さった。

それは、目を覚ました。

そして気がつく、己の身が危険にさらされていることに、己に今まで食らったことの無い、殺すための無慈悲な一撃が加えられていることに。

そして、それに続くように、火炎の魔剣を揺らめかせ、こちらに駆けてくる人間がいることに。

正直、驚いた。

『蒼の魔道士』などと大層な名で呼ばれていても、まさかこれほどの水魔法を短時間で詠唱、そして具現させるとは思っていなかった。

自分の、付加魔法の方が遅くなってしまうんじゃないかと思ったぐらいだ。

まあ、とりあえず、自分の属性でもある、火の中級魔法「火炎弾」＞ファイアーボール＜をすばやく、己の剣に付加させるて、走り出す。

ちょうど、レッドワイナスが、水の槍をその身に受けて、のた打ち回っているのが見える。

この一撃で、死んでくれないのはかなりショックだが、今はたたみかけることが先決だと意識を切り替えて、レッドワイナスに切りかかる。

「はあーーーーー！」

気合一線ただ振り下ろすのみの斬撃、それでも私の手に、ひどく鈍いが、間違いなく切りつけた感覚が返ってきた。

「さすがー、やるね」

軽い口調の声が、隣から聞こえてくる。

軽く、視線だけ向けると、栗色の髪の少年が、自分と同じようにレッドワイナスの鱗に剣を突き立てていた。

「二人とも、離れろ」

そして、注意の喚起の言葉共に、私達の前に銀髪の無口な少年が飛び出して来ると、彼が着込んでいるマントの中から色違いの液体が入ったビンを、レッドワイナスの顔面に向けて投げつける。

「ロード、いまだ！」

珍しく、先ほどからしゃべっているキールの指令、そして、親友の深紅の髪の少女が放ったであろう、神速の矢が二本、ビンをかち割った。

戦闘前、いや、この三日間何度も話し合ったからこそ、とっさに私は目をふさぐことができた。

それでも、まぶたの裏を刺し貫くような閃光。

そう、彼が投げた二本の液体は混ざると、強力な閃光を放つものだった。

さすが、錬金士だとしか言えないその威力に少しめまいを覚えながらも、しっかりと目を開けて獲物を凝視する。

そこには、不意を突かれすぎて混乱するレッドワイナスの姿があった。

それを確認して、栗毛の少年と目配せすると、私は一気にたたみかけるために駆けだした。

目の前の、レッドワイナスはよほど混乱しているのか、手を振り回すばかりで、ブレスを吐く余裕も無いらしい。

だからこそ、ここでもっと余裕をなくさせるべきだ。

ならば、狙うのは目だ、それで致命的な一撃を与えることができる。
でも、急がないといけない、徐々にだが水の槍が刺さった後が回復してきている。
やはり、飛竜種の生命力はとんでもないものらしい。
そう考えながら、弓に矢を二本番えた私の視線の先、そこに銀髪の青年が二本の液体が入ったビンを投げたのが見えた。
「ロード、いまだ！」
まるで、私がそこを狙って弓を番えているのがわかっているかのような科白。
面白い。
そして、私は引き絞った弦をそのいくべき方向に向けてとき放った。

今日は、驚いてばかりだ、さっきのクオーツ君の魔法にしても。
ようやく完成したらしい、メアリィ様の付加魔法にしても。
キール君とロードちゃんのコンビネーション閃光弾にしてもだ。

だからこそ、ここは私も動かないとわすれられちゃうなー。

と、ひとつため息をついてから。

私は、愛用の包丁を引き抜く。

まあ、私が包丁と読んでいるだけで、メアリィ様とロードちゃんには、なぜかそれはどう見ても大鉈だ、といわれたけれどね。

まあ、いいでしょう。

そして、私も銀の髪とヘッドドレスをなびかせて前線で戦う剣士二人に加わるために駆けだしていく。

さてと、今日の晩御飯はトカゲの丸焼きかしら？

お手製閃光弾が炸裂したことを確認して。

すばやく後衛に戻る。

後は、クオーツのサポートで十分おつりが来るだろう。

前衛は、盾とロングソードを持ったガイアと火炎の魔剣と化した大型の愛剣を振るうメアリィ嬢、そして、どこから出したのかわからないがその身の丈ほどもある大鉈を縦横無尽に振るっているマリア嬢。

そして、先ほど自分の閃光弾を見事打ちぬいてみせたロード嬢は、なおもレッドワイナスの目を狙って矢をいかけ続けている。

正直、うまくいきすぎて怖いくらいだ。

「クオーツ、もう一撃いけそうか？」

だからこそ、最後の一撃になるだろう魔法を唱えようとする親友にしゃべりかける。

「ああ、赤トカゲの氷像をつくってやる」

そして、俺の心配をあっさり打ちぬくように彼は、そういって笑った。

それは気がついていた、自分の命が今刈り取られようとしていることに。

それは気がついていた、目の前の魔剣の少女一人とっても、その力量は自分をしのぐだろうことを。

そのみを、ロングソードに傷つけられながら、そのみを、魔剣に焼かれながら、そのみを大鉈に捌かれながら。

己の、視力を奪った閃光と共に、飛来した弓が己の目を撃ち抜いたことに気がつきながら。

そして、今、己を殺すだろう、圧倒的な魔力を練りこんだ魔法を放とうとする少年を肌に感じながら。

ああ、我は死ぬのだな

そこまで、考えて、赤き小竜は、意識と命をすべて凍りつかせた。

最後に見えたのは、視力を失っていてもわかる、冷たき魔法。

最後に聞こえたのは、冷たき言葉。

『凍る大地』＞アイ・アイスマウンテン＜

それが、最後に感じた、彼の終わりだった。

「終わったな」

蒼髪の少年がため息をつく。

「案外、あっけなかったなー」

栗毛の少年が軽く呟く。

「疲れましたわ」

金髪を後ろにくくった少女が天を仰ぐ。

「今日の夕飯はどうしましょうか」

銀髪のメイドさんが、目の前の氷像を眺めている。

「もう一頭くらいいけそうだな、お前達」

深紅の髪の少女が苦笑する。

「まだまだ、改良の余地ありかな」

銀髪の少年が吟味する。

「・・・・・・わたし、何もしてない」

そして、最後に銀髪の少女が寂しそうに呟いた。

雅なる月のごとく　五幕（後書き）

弱いですって？

いや、でも不意打ちめまいたこ殴り氷棺の四連コンボですからね、死ぬんじゃ無いでしょうか？

誤字脱字感想意見お待ちしております。

一応、次回で　外伝　雅なる月のごとしは終わる予定です。

まあ、こんな作者ですからあくまで予定ですけど。

雅なる月のごとく　終幕（前書き）

おわりです、雅最後です。

雅なる月のごとく　終幕

ラグリオン学園、魔法研究塔の一室、そこでは小さな先生と生徒が向かい合っていた。

「はい、クオーツ君、君の卒業証明書だよ」

見た目年齢不詳な十五歳が、俺に向けて、賞状のような紙切れを渡してくる。

「ありがとうございます、先生」

俺の、お礼の言葉に少し寂しそうな表情を浮かべるアイナ先生。

「はいはい、君には負けたよ、まさか赤小竜とはいえ、飛竜種をしっかり倒して来てしまうとはお思わなかったよ」

「皆のおかげですよ」

俺は、かすかに笑みを浮かべて答える。

「皆か、普通レッドワイナスといえども討伐は三十人編成が基本なんだけどね」

俺の、返事に苦笑を浮かべると、アイナ先生はそうポツリとこぼした。

「まあ、いいや、君は私の課した無理難題をすべてこなしてしまったからね」

そして、その苦笑を寂しげな笑顔に変えると。

「クオーツ君、卒業おめでとう」

彼女は、最後の授業を終えた。

月がさんさんと輝く夜、俺達は下宿している酒場のテラスを陣取って飲みまくっていた。

「皆の卒業と、無事を祝ってー」

『かんぱーい！』

音頭と共にもっていた果実酒のジョッキを一気にあおる。

そのまま、一気にのみ切ると一度ジョッキをおいて周りを見渡した。

今現在、ジョッキを打ちつけているのは、自分達だけではなかった。

テラスから見ることができる街中、そこかしこで同じように数人ずつ固まった少年少女達が酒盛りをはじめており、俺達が陣取っている酒場と同じ光景が都市内のいたるところで確認できるだろう。

「良かった、良かったー」

「キール君は結局何を作ったの？」

「・・・・・・にがい」

そして、同じテーブルについている仲間達も思い思いにしゃべり始めていた。

「メアリィ嬢、君の方はどうだった」

俺は、正面に座っていた軽くウエーブした金髪を持つ少女に話しかける。

「ああ、無事、剣士科も付加魔法科も卒業できたよ

試験内容がかぶっていたから、そういう点では楽だった」

俺の質問に、一人満足げにうなずきながら彼女は答える。

その横では、珍しく私服を着たマリアも果実酒をのんでいる。

「そういえば、マリアの試験はなんだったんだ？」

その光景を見ながら、俺はふと疑問に思ったことを訊ねた。

「私ですか？一週間一人の生徒を主と定めて仕えるというものですが」

彼女が言うには、それがちょうど俺達が試験に向かっている期間だったらしい。

その生徒が、ほとんどストレスや不満を感じなかったようなら合格とのことだ。

まあ、あの一週俺達はマリアに養われているような状態だったし、確実に合格だろう。

朝昼夕の豪華な三食付から始まり、朝起きれば洗濯物が洗濯済みで枕元に綺麗にたたんで置かれていたのは序の口。

夜、見張りの時は、さりげなく暖かい飲み物の入ったポットが置かれていたり。

凍りついたはずのレッドワイナスがいつの間にか三枚におろされていたり。

良く考えてみたら、最終日の晩飯は飛竜のステーキだった気がする。

まあ、そんな感じで、男の下宿暮らしの俺からしたら、彼女と一緒に依頼を受けているほうが贅沢をしているんじゃないかといったレベルだった。

まあ、マリアは合格だろう。

ガイアももちろんCランク以上を討伐したので合格。

キールは、レッドワイナスの角から精力剤を造ったら、先生に喜ばれたらしい。

ロードはCランク以上の討伐をチームで行うのが試験内容だったらしく、もちろん合格。

そして最後にライナス、卒業試験内容は筆記試験が二枚だったらしい。

なぜ、一緒にきたのだろうか？

合否をいえば、酒場に入って来たときにハンズアップをしていたから合格していたのだろう。

多分・・・。

さてと、次は、これからどうするかだな。

気持ちよく酔っているところ悪いが皆の意思を聞いておこうか。

「そういえば、皆はこれからどうするんだ」

「俺は、クオーツについて行くぜー」

軽く良いが回っているガイア。

「メアリィ様について行きます」

淡々と樽で酒を流し込んでいるマリア。

「楽しければそれでいい」

半分、眠りに入っているロード。
「ガイアに同じく」
気持ち悪そうにしているキール。
「どこまでも・・・ついていく」
たくさんの酒瓶を並べているライナス。
「私は、クランを作ろうと思っている」
頬を薄らと朱に染めたメアリィ。
『君は、あなたは（どうするんだ）』
そして、全員がこっちを向いた。

俺か、はっきりいってまったく考えていなかった。
この六年間将来のことを考えるよりも、無事卒業できるかが問題だったからな。
だから、誰かの意見を借りようと思ったんだけど。

・・・・・・・・・・・まともに考えているのメアリィしかいない。

じゃあ、しょうがない。

「俺も、クランを作ろうかな」

と、ボソッとこぼす。

「せっかくだ、ここにみんないることだし、みんなでクランを作ろうじゃないか」

俺の言葉を、メアリィが都合よく書き換えてしまった。

まあ、いいけど、俺も適当だしね。

「クランっていったらさー、やっぱ名前が無いとねー」

珍しくいいことを言ったぞ、ガイア。

何か失礼なこと考えてない？と言うガイアは、ほおっておいて。

「メアリィなんか考えているのか？」

「ああ、もちろんだ」

―私達のクランの名は・・・・・・・・・・。

月光華　＞フレグラス＜

我らが、夜を照らす一輪の花とならんことを、願って。

酔っ払いどもが、クランを作るのに最低でも十五名必要であるということに気がついたのは、その次の日のことである。

あれから、何年のも月日が流れ、俺は二人の子供の親になっていた。

今も駄々こねる双子をあやしているところだ。

そして、ようやく寝静まったらしい双子の顔を交互にみてから静かに立ち上がる。

ベットで眠る姿だけはまるで天使のようだが、おきているときは暴君のように元気いっぱいで、それもまたほほえましい。

「お休み、クレア、サクラ」

まだ、揺り篭に揺られながらも合わせ鏡のように左右対称の色合いを持った双子の兄妹、静かに眠っている二人に優しくキスして部屋を出る。

揺り篭がかかっている窓際、そこからは優しく月光の光が子供達に降り注いでいた。

まるで、子供達が夢の中でも闇に迷わないように輝く道しるべのように。

―雅なる月のごとく　ＥＮＤ―

『蒼の魔道士』　クオーツ・サフィラス

冒険者クラン『フレグラス』の団長。
数々の功績を経て、その後サフィラス＞蒼の玉石＜の爵位を与えられる。
後に、冒険者の村＞フレグラス村＜を作り上げ、メアリィ・ツヴァインツェルと結婚する。
その後、双子の兄妹の親となる。

『灼熱の魔剣士』　メアリィ・ツヴァインツェル

ツヴァインツェル＞2公＜家の三女として生まれ。
ラグリオン学園に入学する、卒業後クオーツと共にクラン『フレグ

ラス』を創設、副団長を務める。
クオーツが爵位を得て、冒険者の村＞フレグラス村＜を作ったあと、クオーツと結婚、そのときにツヴァインツェルの爵位は国に返還している。
その後、双子の兄妹を出産、クレアとサクラと名づける。

『銀狼の従士』　マリア

もともとツヴァインツェル家の召使として生まれ、メアリィとは姉妹のように育つ。
成長してからも、同じラグリオン学園に入学するなど、生涯メアリィに付従う。
ツヴァインツェルの爵位を返還しているので、メアリィは貴族ではないのだが、それでもついて来るマリアだった。
のち、冒険者の男性と結婚して、一人の少女を出産、ドロシーと名づける。

『剣戟士』　ガイア

卒業後、戦いの中で盾の変わりに、剣と戟の二本を持って戦うスタイルに切り替えている。
その実力は、魔法剣を使わないメアリィに並ぶとも言われており、剣士スタイルの冒険者達の目標となったほどだった。
のち、冒険者の女性ではなく、故郷の幼馴染と結婚、二人の子供に恵まれる。
長男はカルマ、長女はアルマと名づける。

『錬金士』　キール

学者肌の先生方に惜しまれながら卒業、その後、クオーツたちと共に討伐した数々の魔物から多くの魔道具を作り出す。
村ができた後は、『薬草士』の女性と結婚。
生まれた息子をクレスと名づける。

『深紅の狩人』　ロード

その高い隠密性、一発の狙いも外さないその腕から、深紅の暗殺者とも呼ばれたほどの腕を持つ。
だが、その称号に似合わず本人はいたって明るい性格のため、本人であると理解されないことがたびたびあったそうだ。
村ができた後は、同じ『弓士』の男性と結婚。
自分と同じ特徴を持つ、女の子を出産する。
名前はシルクと名づけられた。

『白銀の聖職者』　アイナス・イヤー・ヒーリングス

クオーツ以外で、爵位を貰った唯一の女性団員。
放浪癖があり、いつの間にか消えていることが良くあったそうだ。
そのたびに、どこかの王族を知らないうちに救っていたり、邪竜を気がつかないうちに封印していたりしたらしい。
村ができた後は、どこからかふらふら帰還。
旅の間に、心配になってついてきたらしい『治癒士』の男性と結婚。
その後、長女を出産フレスと名づける。

雅なる月のごとく　終幕（後書き）

まあああ、＜フレグラス＞を書きたいがために生まれた外伝であります。

長々とお付き合いありがとうございました。

次話からは本編に戻る予定です。

誤字脱字感想意見の方お願いいたします。

五歳、夏の始まり（前書き）

第三章、始まりました。

本編は相変わらず、一話一話は短めですが、毎日できるだけ投稿していきたいと思っています。

それでは、三章もクレアとサクラにお付き合いください。

五歳、夏の始まり

木々の間、駆け抜けていく一角の兎、その白い姿を目で追いながら、目の前の茂みを飛び越える。

―サクラ！俺の位置から前方１０メートルの位置だ！

俺から見て、左方向の小高い丘、その頂上で座り込んで兎に狙いをつけているはずの妹に、指示を出しながら、俺も走りながら詠唱を開始する。

―「汝、敵を阻む壁とならん」

『炎上壁』＞ファイアウォール＜

詠唱魔法火属性中級スペルが兎の進行方向をふさぐ。

俺の左前方を走っていた、一角兎が炎上壁を沿うようにその進行方向を左に変える。

サクラが待つ丘の方向に向かって。

―後は、頼む

―ええ、わかってます、兄さん

そう思念を飛ばしてから、右腕にはめている腕輪の魔法陣に魔力を流す。

―始動キー『コード・バリスタ』

腕輪に刻まれた魔法陣が薄く発光し、まっすぐと伸ばした私の左腕の中に光の粒子が集まってくる。

そして、光が薄れた後、その手には小ぶりのクロスボウが出現していた。

その重さは、思ったよりも軽い。

―矢は緑、風の眷属を弾丸とする

右手の腕輪にもう一度魔力を流す。

流した魔力の属性は風、風の魔力色である緑色の魔力が魔法陣に流れ込み視覚化される。

その、風を纏った矢をクロスボウの弦に引っ掛け、構え直すと。

一角兎がこちらに向けて森から飛び出してくるのが見えた。

その距離５０メートル、まだ、後ろをおっているクレアに気をとられているのかこちらに気がついている様子は無い。

５０、４０、３０

頭の中で、静かに数えながら。

ゆっくりと、兎の額、その一角に狙いをつけた。

２０、１０

ようやく、こちらに気がついたのか身を翻そうとする一角兎。

だが、もう遅い。

「おやすみなさい」

―『発射』＞シュート＜

始動キーと共にクロスボウの引き金を引き絞った。

そして、風を纏った矢が、緑色の軌跡を残して、一角兎の額に吸い込まれていった。

―これで、三羽目だな

―後、二羽ですか、クレス達の方はどうなったでしょうかね？

思念を飛ばしながら、皆との集合場所に戻ってくると、兎を三羽抱えたクレスがまっていた。

―おや、これで終わってしまったようだね

―ええ、少し残念ですが

後、二羽狩らないといけない、と思っていたのだが、その考えは待っていた三人組にあっさり覆されてしまった。

「お帰り、クレア、サクラ、収穫はどうだい？」

修行の旅に出たカルマに変わって、子供達の纏め役になっているクレスがそう訊ねてくる。

「僕とサクラで三羽だ、角も全部とってきたよ」

そう返事をしてから、もっていた獲物をクレスの前に降ろす、その後、サクラが俺のおいた兎の隣に折れた三本の角を並べていった。

「三羽とも、額を撃ち抜かれているわね、どうやったの？」

並べられた、三羽の兎を見て、フレスがため息をついた。

『ないしょです』

俺とサクラが笑いながら答えると、苦笑を浮かべたクレスがちょいちょいと手招きをしてきた。

「クレア、いつもどおり火をつけてくれ」

そう言って、指をさした先には、アルマ薪を集めていつものように放射状に並べている姿があった。

「アルマ、危ないからよけてくれ」
俺の言葉に、こくりとうなずいてから立ちあがったのを確認してから。
ー「火よ」＞フィア＜
詠唱魔法初級火属性スペルを使って薪に火をつける。
「兎の、納品は五匹だから、一匹おやつに食べて行こう」
ある程度、火が大きくなった薪に角を失った兎を一匹投げ込みながらクレスがそう宣言すると、みんなが歓声を上げた。
兎の右後ろ足を貰って食べてから、村に帰るために立ち上がる。
後は、冒険者ギルドに行って報酬を受け取るだけだ。
今回の依頼は、一角兎の肉を五羽分納品すること、角は別払いの報酬に当たる。
だから、おやつ代わりに一羽食べてしまったのだが、引き締まった野生の肉はなかなかおいしかった。
「さて、みんな帰ろうか」
『はーい！』

クレスの号令に皆で元気良く答えると、俺達はぞろぞろ歩き始めた。

目指すは、俺達の村、冒険者の村＞フレグラス村＜

さんさんと、強く成り始めた太陽を浴びながら帰路につく。

その光を浴びながら、もう春から夏に季節が移ったのだと実感しながら、歩いていく。

季節は、夏の季節。

俺達が、五歳になって向かえる、夏の季節が始まりを告げていた。

五歳、夏の始まり（後書き）

二章の最後に出てきたサクラの腕輪の可変武器。

クロスボウにいたしました。魔法銃とどちらにしようか迷ったのですが、始動キーがコード・バリスタなのでクロスボウになりました。

まあ、撃てば弾が出てくる銃よりも、一撃一撃、装点しないといけないクロスボウの方がチート臭はしなくていいかなと思ったしだいであります。

主人公二人、強くてもチートでは無い、最強では無い。

そんな二人を書いていくつもりなので。

まあ、存在的には限りなくチートに近い二人ですが。

誤字脱字感想意見などありましたら書き込みお願いします。

採取依頼は苦手です。（前書き）

何か、急に・・・・・・・・・・・・・・。

ＰＶが増えました・・・・・・・・・・・・・・。

お気に入り登録も増えました・・・・・・・・・・・・・・。

な、何があったの？

ガクブル（（（；゜д゜））））ガクブル

採取依頼は苦手です。

ギルドの扉を軋みを上げながら開けると、いつもどおり、受付には笑顔が素敵なアクア姉さんが座っていらっしゃた。

―アクア姉さん、時々見せるSな笑顔を見せなければ美人さんなんだけどな

―ええ、そうですね、私は今でも登録の時のあの恍惚とした表情がトラウマとして残っていますわ

考えていたことが、【以心伝心】で妹に漏れていたらしく、返事が返ってきた。

ちなみに、あの祭りの依頼から採取系の依頼を受けるのが怖くなり、ほとんど受けていないのは余談である。

まあ、受けたら受けたで、まともに持って帰ってこれないので、たまに【クレア君とサクラちゃん用　森で何か持って帰ってくる　報酬　品物しだい】といった、かなり丸無げな依頼書が掲示板に貼り付けられていたりする、ちなみに依頼者はクオーツ・メアリィと連名で書いてあることがほとんどだ。

「アクア姉さん、依頼の終了報告に来ました」

リーダーになったからか、少し皆の前では明るくなったクレス、その報告を聞いてアクア姉さんが頬を緩めるといつもの笑みを浮かべた、ぞくっとするほうね。

「ご苦労様、で、双子ちゃんは今日は何を持って帰って来てくれたのかな？」

『兎の角です！』

ここだけは、譲れない、確かに三羽狩ったし、三羽共一撃で角を折ったのだ、摩り替わる時間など存在しない。

ー今日こそは、勝つ！

はて、何に？

ー世界の不条理にですわ！

では、妹と、一心同体になったところで。

ー結果発表ー

一角兎の肉、一角兎の皮、一角兎の角、一角兎の爪、一角兎の骨、一角聖獣の角？

『・・・・・・・・・・・・・』

一本、一角聖獣＞ユニコーン＜の角が混ざっていました。

ああ、思わず一角兎の角のなかに一本異常な雰囲気の物が紛れ込んでいた時点で、兎を皮と骨までさばいてしまったぜ・・・。

ーーって

『なぜだーーーーーーーーーー！』

なま暖かい視線を受けながら、俺達は絶叫した。

「ま、負けた・・・」

と、両手を地面につき落ち込んでいる体勢になる、双子二人。

「何に、負けたのよ？」

頭の上から、苦笑気味のフレスの言葉が降ってきた。

「世界の、不条理に・・・」

双子が、ギルドでうなだれていたころ、フレグラス村の入り口を三人の人影がゆっくりと、とおり過ぎた。

「ここは、相変わらずのどかね・・・」

先頭を歩くのは、魔女のローブをきた蒼髪の女性。

「どこかで、双子ちゃんの絶叫が聞こえた気がしたのだけど？」

そして、それに続くのは綺麗な金髪を風に流しながら、緑色に輝く瞳に好奇心を浮かべてきょろきょろと周りを見回すエルフの女性。

「・・・・・・・・・・・・・」

そして、全身をすっぽりと覆い隠してしまう大き目のマント着て、顔もフードでかくしてしまった人影がひとつ、エルフの女性に手を引かれるようにして歩いている。

「アイウス、あんたは、どんだけ耳がいいのよ」

はあ、とため息をついて、エルフの女性に疑念の目を向けると、すたすたと、蒼髪の女性は歩き始めた。

「ちょっとまってよ、キャシーは気にならないの？」

小柄なフードの人影の手を引きながら、アイウスと呼ばれたエルフの女性はあせったようにあたふたとしている。

「あのね、この村で悲鳴をあげるような人間なんて私の甥と姪に決まっているでしょう！」

キャシーから放たれたその否定なのか、断定なのか良くわからない返答に押されるように、アイウスはうっと言葉を詰まらせる。

「それに、今はこの子を兄さんの所に連れて行くのが先よ」

さっき怒鳴った時の、厳しい表情を緩めると小柄な人影に視線をうつし、優しげに笑うキャシー。

「まあ、そうね・・・、行きましょうかユノス」

「・・・・・・・・・・・・・」

二人が、小柄の人影に語りかけると、ほとんど反応を返さないそのフードのが縦に一回だけ揺れた。

その行動に優しい笑みを深くすると、三人は歩き出す。

村を抜けて、その先、小高い丘に立つ領主の家に向けて。

採取依頼は苦手です。（後書き）

えーと。

外伝、なかがきをアイナ先生の魔法試験に書き換えました。

暇つぶしに書いたものなので、雑なところはありますが。

良かったら、読んでください。

誤字脱字感想意見お待ちしてます。

鴉いないけど、疲れたので帰りましょう（前書き）

ＰＶ４００００越えたと喜んでいたら。

題名を変えてから、立った二日で５００００を越えました。

題名の力って偉大ですね・・・・・。

鴉いないけど、疲れたので帰りましょう

ギルドでの依頼を終えて、俺達は帰路に付いている
ひとり、また一人と別れて行き、村を抜けると隣に立っているのはもちろんサクラ一人だ。

―妹よ

―どうしました、兄さん

【以心伝心】を使っているのでこちらを振り向く必要はないのだが、わざわざ上目遣いで見てくるサクラ、ああー、また可愛くなったなー、絶対嫁にはやらん。

と、心に決めながら。

―家まで、走るか？

―久しぶりに競争ですね、負けませんよ

サクラは、軽く頷いてから、サッと走り出した。
別にフライングでもなんでもない、そう、魔族の身体能力を失ったサクラと俺の差は、この何年かでそれだけ付いていたのだ。

５　４　３　２　１

自分の中で軽くカウントしてから、俺もサクラの背中をおって走り出す。
領主の屋敷が立つ小高い丘を、二人のまだ幼子と行っていい位の二

人が楽しそうに駆けて行った。

「お帰りなさい、サクラ様、クレア様」

家の前まで付くと、ドロシー嬉しそうに出迎えてくれた。
その手に、大き目の籠を抱えていることから、きっと洗濯物を取り込んでいたのだろうと当たりを付けて。

『ただいまー』

と、二人でドロシーに抱きつく。
まったく、よろける様子も見せずに俺達を抱きとめると、優しく笑顔で抱き締めてくれた。

「あらあら、二人ともおひさまのにおいがいたしますね、今日は楽しかったですか？」

「うん」

「ええ、楽しかったですわ」

あーれー、何かドロシーの前では俺、幼児退行してないか。

と、ちょっと悩みながら、ドロシーのエプロンドレスに顔をうずめていると。

一兄さん、いまさらですよ

と、いわれてしまった、どうやら、もれていたらしいな。
などと、あまりためにならないことをうだうだ考えていると、もちろん、ドロシーのエプロンドレスに顔をうずめたままだが。

「お二人とも、今日はお客様がいらしていますよ」

と、少し高い位置から、ドロシーの声が降ってくる、まだまだ、身長は追いついていない俺です、ぐすん、ふん、今に見てろいつか絶対ドロシーの上目遣いを見てやるんだから。って

「お客さん？」

「お客様ですか？」

と、二人で首をかしげる、それもそのはず、客が来るなら大体朝のうちに知らせれることが多いからである。
つまり、突然来る客など、めったにいない。

「誰がきたの？」

と、ドロシーを見上げると。
彼女は、クスッと笑ってから。

「あってからの、お楽しみです」

と、少し意地悪そうな瞳で言ってまいりました。

とりあえず、抱きつくのを解除してから左右一人づつドロシーと手をつないで、残りの距離を歩き出す。
実をいえば、ドロシーが出迎えてくれたのは家の塀のところであり、一応貴族らしく、面積だけは無駄にでかい敷地内を三人で手をつないで歩いていく。

「そういえば、今日の依頼はどうでしたか？」

いつも、なんだかんだと依頼がうまく行かないことを知っている、ドロシーが少しからかいを含んだ声で聞いてきた。
ふん、意地悪だ。

「うーん」

「そうですね」

と、悩む俺達二人、ドロシーはその時点でなんとなく気が付いたのか、少し口元を緩めている。

『世界の不条理に』

「まけた」

「まけましたわ」

と、図ったように答えると、

「何ですか？それは」

と、我慢しきれなくなったのか、笑い出しているドロシーがいた。
笑顔は素敵ですが、こんなことで笑われると傷付きますドロシーさん。
とか、くだらないそれでもどこか愛しい、会話をしていると家の前まで付いてしまった。

少し、名残惜しそうにてを離してから、扉に手をかけて、ゆっくりと押し開ける。

「ただいまー」

「ただいまですわ」

「ただいまもどりました」

と、三者三様の科白を吐きながら帰宅を告げる。

「お帰り」

「久しぶりだねー」

「・・・・・・・・・・」

出迎えてくれたのは、久しぶりに帰ってきたらしい。
蒼髪の軽くマッドな魔女さんこと、キャシー姉さんと、流れるような金髪と好奇心を常にたたえている緑色の瞳をもった、どこか残念なエルフことアイウスさん。

そして、二人の後ろに隠れるようにして、こちらを見ていたのは。
透き通るような白髪に青い瞳もち、その耳はアイウスさんと同じく長くとがっている、まるでお人形さんのように綺麗な少女だった。

鴉いないけど、疲れたので帰りましょう（後書き）

やっと、出せました。

白髪エルフちゃんでーす。

まあ、正確にいえばエルフじゃごほんごほん

ふーむ、初期段階から出そうと思っていたキャラが出せるとなかなか感慨深いものがありますねー。

それでは、また次回。

誤字脱字感想意見など、かきこみおねがいいたします。

大切なお話の時は、盗聴してはいけません。（前書き）

ユーノスでたー、出せたー、ヒャホーーーーイ！！

あと、おきにいり登録が１００を越えましたありがとうございます。

大切なお話の時は、盗聴してはいけません。

「ほら、ユノス挨拶しなさい」

相変わらず、厳しそうですねキャシーおば、姉さん、今睨まれましたよ！キッて。

ーキャシー姉さんが怖いよ！

ー失礼なこと考えるからですよ

あれ？サクラも敵ですか？

ーおばさん呼ばわりする人は、女性の敵です！

妹も怖かったです。

「こ、こん・・・に・・・ち・・・は」

少し金の混じった雪のような白髪をゆっくりと下げて、これはお辞儀ですねわかります！

ー兄さん、少しウザイです！

母上様ー、妹がグレましたーーーー！！

しかし、何でしょうね？この可愛さ。

ユノスと呼ばれる少女は、金の混じった白髪、プラチナブロンドと

もいえばいいだろうか？
に、透き通ったような青の瞳を持ち、アイウスほどではないが、確かにその耳は尖っている。
アレですか？ハイエルフでしょうか？それてもハーフな方ですか？
と考え込んでいると、妹様に、ギッとにらまれました。
最近、感情表現が激しくなってきたサクラさんなのでした。
「こんにちは、ユノスさん、私はサクラと申します」
―兄さん！名乗らせておいて、返事をしないとはどういう了見ですか！
「はい、すみません！」
―こんにちは、クレアです！
―逆ですわーーーーー！！！
はい、すみません、間違えました、許してください。
だから、アイウスさんも、キャシー姉さんも、ユノスちゃんもこっちを凝視しないでーーーー！
俺がユノスに対して発した第一声は謝罪の言葉でした・・・。

「ようやく、寝静まった見たいね」
子供達が、客間で寝たのを確認してから、私は静かに扉を閉じる。
いま、客間の大きなベットを左からサクラ、ユノス、クレア、ドロシーの順に並んで子供達が寝ている。
その光景に思い出して微笑を浮かべながら、私はキャシーとアイウスがクオーツと話している、居間まで戻って来た。
「メアリィ、子供達は寝たかい？」
居間に入ると、クオーツが私の顔を見てそう訊ねてきたので、「ええ、ぐっすり」と答えてから、静かに彼の隣のイスに腰を下ろした。
「あの子が、あんなに楽しそうなのは初めてよ、やっぱり連れて来て正解だったみたいね」
そういって、笑う義理の妹に顔を向けると、その横ではアイウスも同じような表情を浮かべていた。
「それで、早速だけど、彼女の話をしてくれるかな」
そんな、和やかな空気を断ち切るように、クオーツが話し始めた。
「彼女は、ご想像のどおりハーフエルフよ．．．」
説明を始めたのはアイウスだった、まるでそれが自分の責任だとで

もいうように。

「そう、やっぱり彼女は『ハーフエルフ』なのね・・・」

わかってはいたが、その言葉を聞くと私の心には痛みしか湧いてこなかった。

『ハーフエルフ』と呼ばれる者達の歴史を知る人間としては・・・。

―妹よ、できそうか？

―ええ、何とかできそうですわ・・・、でも、今の私の魔力じゃ持って一時間ですわよ

―それだけ持てば、十分だろ

―ええ、いま・・・ つなぎますわよ

さて、ここで俺達が何をやっているか不思議に思っている人間もいるだろう。

まあ、盗聴だ！

古呪魔法で『遠耳』というものがあったのを思い出したので、今回使って見たというしだいである。

―うーーん、きましたわ・・・

『・・・・・・や・・・り、『ハーフエルフ』な・・・』

『ええ、ん？』

『どうした？キャシー』

『んー、いや、気のせいね・・・』

―感度は良好だな！

―ええ、ばっちりですわ

しかし、ハーフエルフかやっぱりそうだったのかー

と、横で寝ているユノスの頭をなでて見る、なにかいいにおいがするのですが！

―兄さん！何をしているのですか？

怒鳴られました！

後、俺の背後から何か殺気が！あれ？後ろに寝ているのってドロシーさん？

何で果物ナイフを持っておられるのですか？

キャーーーーーーーーーーー！！！

カリカリ、

「そう、じゃあ、盛大に歓迎パーティをしないとね」

―どうしたの？キャシー、急に筆談なんて？

「ありがとう、きっとユノスも喜ぶよ」

カリカリ、

―双子ちゃんのらしき、魔力を感じたからね、念のためよ

残念、まだまだ、一枚も二枚も上手な親達なのでした。

大切なお話の時は、盗聴してはいけません。（後書き）

皆さんも盗聴にはきよつけましょうね！

してもいけませんよ！

誤字脱字感想意見など書き込みお願いいたします。

それは聞くべきだった世界の悲鳴（前書き）

今回は少し暗い話です。

そして、この話しの根幹部分でもあります。

それは聞くべきだった世界の悲鳴

始まりは一人のエルフの王。

彼は、人という種族をとことん嫌い、排他的な政治形態を作り上げた。

ハイエルフもエルフ族もすべて里に篭り、彼が王であった期間外にでることは無かったそうだ。

しかし、エルフ族だけでこの世界を生き残ってはいけなかった。

もともと、プライドの高かったエルフ族は好んで奴隷を使っていたのだが、その奴隷達も里から追い出した今、彼らは新しく使役する奴隷を求めた。

しかも、その用途におおじてだ。

そして、その奴隷の候補として彼らは彼ら自身が穢れた存在としていた『ハーフエルフ』に目をつけた。

人間を奴隷として使役できないなら、こいつらを使えばいい。

そして、数々の『ハーフエルフ』達が『造られた』

たとえば、愛玩用に妖精達と交配させて作られた物もいたし。

力を強くするために『ワーウルフ』と交配して造られた物もいる。

メイドを作るなら、「森の主」である彼らに従順なドライアドと交配したハーフエルフと、
その種類はさまざまだ。

その後、エルフの王国は、人間達と戦争を始めた、きっかけなど些細なことだったが、彼らは己が血に穢れるのを嫌い、戦場にまで彼ら『ハーフエルフ』を投入したのだった。
ワーウルフの本能をとき放たれたものは、死ぬまで暴れ続け、オーガと交配させられたものは、その強力な膂力で迫り来る人間達をなぎ払った。

それでも、エルフ達は押され続けた。

その理由の一端としては、ハイエルフ、つまり王族以外のほとんどのエルフが人間側に加担したこともあったのだが、所詮、自然と生まれた者ではない『ハーフエルフ』の寿命が短かったのもある。
まあ、それに気がついた彼らも、自然分娩で強力な『ハーフエルフ』を生み出し戦わせる手段をとったのだが。
そして、記録上最後に生まれた『ハーフエルフ』が。
ハイエルフとフェンリル（天狼族）の交配種として生まれた・・・。
『ユノス』だった。

その時にはもう、戦争は終わっていたのだったが。

「あの子達は、もう寝てた？」

カリカリ

―それが、あの子、金の白髪を持った最後のハーフエルフであるあの子よ

「ええ、ぐっすり」

カリカリ

―そう、ハーフエルフの話は聞いていたけど、まさかフェンリルまで使っていたとわね

「そう、あんまり寝てないみたいだったから、良かった」

カリカリ

―でもね、あの子は生まれてすぐに捨てられたわ、そうよね、生まれたときには彼らにとって彼女は意味の無い存在となっていたんですもの

「疲れていたのか、ぐっすりよ」

カリカリ

―そう、勝手なものよね、作っておいて、生んでおいて、いらなくなったら捨てるなんて

「あの子が、あんなにはしゃいでいるのはじめて見たものね」

カリカリ

―ごめんなさい

「あら、楽しんで貰えたみたいなら嬉しいわ」

カリカリ

―なぜ、あなたが謝るの、あなたは悪くないは、アイウス

キャシーがそのまま泣き始めてしまったアイウスの嗚咽が漏れないように、アイウスを抱き締める。

その音を、聞かせないように。

誰よりもさとくて、気がついてしまう双子に聞かせないように。

「私達も、もう寝ましょうか」

そっと、アイウスの肩を押して居間を出て行く二人。

「僕らも、眠ろうかメアリィ」

夫の優しい言葉に、自分も泣きそうになっていたメアリィが、頷いた。

「ええ、そうね、彼女にとって明日が今日よりもいい日になること願ってね」

「ああ、そのためには、早く寝て、彼女に明日も笑顔をあげよう」

二人は、そう頷きをかわすと、ゆっくりと寝室にむけてあるいていった。

彼らは、気がつかない。

それは、時間のゆがみ、世界のゆがみだった。

『導き手』と『秩序』を失った世界の悲鳴であることを。

まだ、幼い彼らであっても、それは聞いておかなければならないことだったのかもしれない。

それが、つらい現実だったとしても。

いつまでも、夢にまどろんでいるわけには行かないのだから。

それは聞くべきだった世界の悲鳴（後書き）

あー疲れた。

次からは明るく行きます。

誤字脱字感想意見書き込みお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6833y/

兄は元勇者で妹は元魔王、今は二人で冒険者　　－元最強のＮＰＣ共（仮）

2011年12月20日21時45分発行